

協

文書課長

大正貳年三月拾七日

附屬書類添付

大正貳年三月拾貳日接受

駐政務局長 第一課

公使第一九二号

大正貳年十一月廿五日

在唐路

臨時代理大使 田村七太

漢

支26042號

外務大臣 牧野伸顯 殿

北系

世帯古問題解決、因る新聞論説

今日世帯古問題、因る露支兩國當る者間、

宣言書、調印了、外交文書、交換、

見、就中、露支協約、因る新聞、社説、

三月二十三日、蒙古、因る露支協約、社説、

三、揭、這般露支、因る協定、以、露支、

ノ、關係、力、確、立、し、る、ト、ナ、シ、近、來、之、紙、力、事、毎、

ノ、外、務、者、ノ、論、議、政、策、手、シ、る、ニ、及、シ、在、問、題、ノ、露、

支、者、ノ、大、ニ、満、足、ノ、表、シ、外、務、者、ノ、力、多、

リ、其、成、績、ノ、對、シ、激、賞、致、告、シ、而、シ、今、紙、ハ、

露、支、國、ノ、對、蒙、古、問、題、ノ、露、支、外、務、者、ノ、手、ヲ、放、

シ、シ、經、済、協、約、ノ、方、面、ニ、轉、回、シ、テ、今、後、ノ、施、

設、ハ、大、概、之、上、ニ、六、通、三、者、ノ、力、ニ、俟、テ、サ、ル、カ、

リ、テ、世、帯、古、ノ、經、済、協、約、ノ、言、及、シ、ク、シ、カ、改、善、ハ、

ノ、計、ハ、露、支、國、間、稅、法、ノ、施、行、範、圍、ノ、外、蒙、古、

全、部、及、チ、ル、ト、論、議、致、意、ハ、在、リ、時、節、柄、多、

ク、亦、亦、多、ク、存、リ、モ、可、相、成、カ、リ、被、存、ル、ニ、付、全、論、道、ヲ、俾、

別、紙、通、シ、呈、送、シ、向、亦、直、接、成、ル、此、能、申、進、ル、教、具、

64

64

2-0060

0345

蒙古と清との支那支協約

(ノルウヰヤ、ラトヴィヤ、  
エストニア、リトヴァニア、  
ポーランド、ルーマニア、  
ブルガリア、ギリシャ、  
セルビア、クロアチア、  
スロベニア、ハンガリー、  
チェコスロバキア、  
南スラヴ諸国、  
バルカン半島、  
中東、  
小アジア、  
メソポタミア、  
ペルシア、  
インド、  
チベット、  
シベリア、  
モンゴル、  
中国)

十月五日在北京公使館に於て、  
宣統三年十月五日、  
見又宣統三年十月五日、  
外交文書ノ交換ノ見たり、蓋し國際的関係ノ條約  
成文ノ如何ノ内ニ、  
内係が斯ノ如クシテ、  
也

蒙古と清との支那支協約  
シテ以前より紛擾ノ種ナリ、  
一度、  
蒙古ノ帝路者ハ支那共同ト分離シ、  
蒙古と清との支那支協約

独立國ノ新條約ニシテ、  
是、  
那ノ不法ナニ要ボト他ノ援助ナシテ、  
ハ蒙古人ノ希望トシテ、  
公平無私トシテ、  
ニシテ、  
非難ノ被ルニシテ、  
國ノ位置ニ安カシク、  
抑、  
權利ノ之ヲシテ、  
シテ、  
ハ蒙古人ト共カ人トシテ、  
ハ兩民族ノ政治的結合ヲ切斷シ、

ハ蒙古人ト共カ人トシテ、  
ハ兩民族ノ政治的結合ヲ切斷シ、

古き此場今自己ノ欲るニ政體ヲ擇フコト其つまぬ  
 ノ權利ナシ也然リトモ又國際的関係ヲ於テ其  
 然ノ權利モ安クオノオカニ壓迫セラレザルヲ得ズ  
 耶其ノ如ク其の内訌ノ紛糾ニ内訌モ著シ蒙  
 ノ服従ノ止ムトモサレ、於テ絶一不中間ノ継続セ  
 ント威嚇スルモ尚ホ十分ニ安カク存シヨウ蒙支内  
 係ノ紛擾ハ一方ニ蒙ヲ於テハ兩路國ノ利益ノ  
 追害シ他方ヲ於テ蒙ヲ去ル者退ク促進シ、從  
 ント永久的ニ継続セリル是ヲ於テ兩路國ノ外交  
 家ハ蒙ヲ去ルシテ支那ノ宗主權ヲ承認セシ  
 ムハ中東條約ノ下ニ蒙ヲ對シ援助ヲ与フルコト  
 トセリ之則北京駐在公使コハストラエツ氏ハ蒙  
 古王公トシテ支那共和國ノ宗主權ヲ認めんノ必  
 要ナシ所以ゾ了解セシム、中國難ク使命ノ帯ヒ  
 兩路國ノ全權トシテ庫倫ニ特使セラレシ蒙  
 政府ニ再ヒ支那ノ服従スルコトニ敢テ兩路國ノ援  
 助ヲ要スルシテ自ラ之ヲ得ルコトノ見解ヲ  
 有シリトシ以テコハストラエツ氏ハ一面蒙古政府  
 ノ外交談判ニ從事スルト今時ニ幼稚低能ナ  
 ル遊牧人種ニ對シ國法及國際法ノ如何ナシ  
 ナカク了解セシム、自ラ教授ノ任ニ當ラザル  
 カラザルコトトシテ而シテ其力不獲不屈ノ努力カ  
 二途ニ蒙古ノ王公トシテ兩路國政府カ蒙古ニシテ  
 支那ノ宗主權ヲ承認スル場合ヲ拒メ其獨  
 立ニ對シ斡旋ノ勞ヲ取ルニアコトヲ悟アセシム  
 至レテ而カモ此ノ内ニ在テ我々全權カ如何

在露國日本大使館

苦心増々増えりレカク露蒙協約ノ草案ヲ列不  
キク之ヲ地ニ投スルニ至リシ一事ニ徴スルモ宛在ル  
ニ難カラス其カチ當分者モ此際ニ及ヒ露國ノ協  
約ニ趣クシ何オ特殊ノ利益ヲ獲得セリトスルモ  
一ニアツキヤンク知アリシ茲ニ始メク一九二二年十一月  
三日松約ノ御印ヲ見タシモトス  
斯ノ如ク我ハ外交山カ辛ツレク其カチラシク支  
那ノ宗主権ノ承認セシムルニ成 取シタリト雖モ  
更ニ困難ナル如ク問題ノ横断アリ即チ支  
那政府ヲシテ蒙古ノ自治ヲ承認セシムルト是也  
クハペレスキー氏ハコリストールエツク其ノ準備ニ於  
テ成シタリシ所ニモク更ニ文明的形式ノ下ニ  
北京ニ於テ繰返シサルカラヤンナリ支那ノ文家

駐露日本大使館

ノ擧用手續ハ時日ノ遷延リ手續ノ認許極  
マキナキナリ我駐支公使ノシテ談判ヲ中止シテ  
未露露國ノ蒙古ニ於テ支那政府ノ要請ノ度  
外視シテ其ノ欲スル所ヲナスレト声明セシムルニ至  
レウ而シテ遂ニ断乎トシ決心ニ遂ニ昨日若表  
セシムル宣言書ノ御印ヲ見ニ運トせんニトス  
支那ノ遂ニ蒙古ノ自治權ト之ニヨリ生スル總テ  
ノ結果トク承認シタリ今後外蒙古ニ支那  
共和國ヲ何事ノ干渉ク要ケスシテ其ノ内  
施行ニ得レシ而シテ支那ノ蒙古ニ於ケル其ノ利  
益擁護ノ方ニ何等政治的機能ヲ有セシ  
特殊ノ駐在官ノ駐在スルコトヲ得レシカシ支  
那ノ支那本部ヲ蒙古ニ移民ク送ラカシム

又露蒙協約及議定書ノ効力ハ全無ニシテ  
 認メ將來露蒙支向ノ交渉ニ就テ該議定書  
 ノ条規ニ準セザルニカクズ別言スルニ支那政府ハ  
 蒙古ニ對スル主權ノ要求ヲ短年退シタセテ  
 カサコフ女ノ管官者等ニ外務省種稟課ニ布敷  
 年々之レニ事案ヲ完成シテ女ノ管カノ結果  
 々々大ナリトスルニ如クト固ニ之ト同時ニ露蒙  
 ノ保護維持權ノ任ニ當ルニ露蒙ニ自治ハ我政  
 府ノ担ヒテ其ノ富メシ地方ノ經濟的及文化  
 的開發ニ對シ積極的施設ヲナスノ場合ノ實  
 現ニストク得レシ然レ近時露蒙トシテ露蒙ニ對スル  
 情勢ニ下レテ經濟界ノ悲境ニ墮ルニ至リテ  
 ナシ夫ノ程内政改革ノ結果ハ露蒙ノ生活狀態  
 日即墮セレテ露蒙ノ通商關係ニ之レ大メノ害  
 及シテ下ニ狀態ノ下ニアルナリ  
 新國家ノ樹立ニ多額ノ經費ヲ要スル而シテ之  
 ノ負擔ハ貧弱ナル人民ノ上ニ係リ往時ノ苛政  
 々脱却セントシテ採ルニ新政ハ偶々露蒙人  
 々新シキ其ノ痛ク之ヲ受ルニ之レ彼等々其保  
 護ノ下ニ置キテ之レ効果ハ何等見ルニ足ル  
 無キナリ露蒙ノ露蒙家ノ接近ニ露蒙  
 々々露蒙ノ一般内政施行ノ範圍内ニ在リ  
 々々露蒙トナスニ向シテ一般ノ施設ニ礙障セル露蒙  
 同ノ高貴ナル活動セル露蒙ニ於テ露蒙國  
 々々露蒙ノ事業ニ對シテ露蒙々々露蒙ノ  
 々々露蒙ノ事業ニ對シテ露蒙々々露蒙ノ

若し結果ノ茲ニ出クサレバ、格ク、締約明文ノ如キ、  
是等ノ結果ナリ官庁ノ徳事ニ属シ定備セン  
國家的事業ヲ承リ給フコトヲ得サレ也  
今後あるコトノ事業ヲ承リ給フコトヲ得サレ也  
者ノ上ニ懸心セリ

在清國日本大使館

2-0060

0350

協

文書課長

大正貳年三月拾六日接獲

電信課長



大臣 四四

次官 六

政務 才三〇九号

露都發 大正二年十二月十五日 本省着 十六日 前七、一〇  
牧野外務大臣 田付代理大使

65

65 23

通商

人事

會計

大正貳年 三月拾七日 文書

政送第ニハニ號

北京

馬送付 大正二年

目下当地滞在中ノ蒙古使節 Jamnorkhan  
當國外國貿易商業會議所長 Jernisoff 氏晚餐  
會ノ席上ニテ露國政府ノ努力カ内蒙古ニモ及ハ  
ン事ヲ希望スル旨ヲ述ヘタリ尚ホ同使節カ露國  
政府ニ提出セル案トシテ *Monce Yernia* ハ  
次ノ如ク報道セル屢前記晚餐會ニ於テ右商業會  
議所會員ハ該提案カ速力ニ実行セラレニ事ヲ希

望スル旨聲明シタリ

提案要領

- 一 露國政府ハ蒙古カ募集ノ必要ニ迫リ居ル五百
- 万留ノ新公債ヲ引受クルコト
- 二 蒙古ニ兵器ヲ供給スルコト
- 三 多教ノ露國士官ヲ養成スルコト
- 右ニ対スル露國政府ノ意向トシテ (一)ニ対シテハ  
擔保ノ事ニ付キ考案中ナルコト (二)ハ陸軍大臣ト  
協議ヲ要スルコト (三)ハ直々ニ承諾セララルヘシト  
当地新聞ハ報道セリ

2-0060

0351

協

電信課長

大臣

次官

通商

人事

會計

文書

社 暗

野外務大臣

田代代理大使

露却度 大正三年十月十八日  
本省若 大正三年十月十八日  
六三〇

第三一五號

往電(兼て復報) 未段、閱し、コゴフ、尋え、不アリ

タルニ同氏、カ一蒙古借款、閱し、其金額ト

條件、明言セサルモ借款、之ヲ否定セサル、ミナ

ラス在来ノ借款、露國ノ累次發表告、拘ラ

ス蒙古カ支那ト、戦闘ニ於テ既ニ全ク之ヲ

消費シ、ルツ以テ今後蒙古内都、組織ト

改善ト、要エルカ、資金集之ヲ供給セサル、カラ

ほり

66  
23

先モ将来一切、借款、嚴重之ヲ戦闘、供用  
 せしメサルハシ蒙古兵、今ヤ露國、切ナル忠告ノ  
 下ニ之ヲ供テ蒙古國境、引揚ケ内蒙カ、  
 一最早一兵モナキ若ク、若シ今後為支那兵ト  
 戦闘スルモノアリトスレハ土人、外ナラサル、又チ二  
 三、尾末通必要ニ應ヒ之ヲ供給ス、ト云ヘリ

2-0060

0352



抄

寫

大正三年五月十九日發廬

牧野大臣

在支山座に仗

第六七三号

蒙古に仗節に於て國政府に借款ヲ中込居ルノ  
 學之休田修代親大佐ノ管向ニ付シコサコフハ  
 蒙古ニテハ一應玉ヨリ蒙政親善シタルニ由ルニ  
 在来ノ借款ハ居ク支那ノ親善ニ由ルニ由ルニ  
 ルカヨ来ノハハ親善ニ由リ親善ニ由ルニ由ルニ  
 メサレシ蒙古兵ハ今中露玉ノ切ナルニ由ル  
 ノ下ニ金部蒙古玉境ニ引揚分内蒙古  
 ニハ易子一兵モ十キ管ナリ着シ今後支那  
 外務省  
 兵ト親善スルモアラハ人ニ外ナラハト格  
 リ老令電報ナリ其細部報

45  
大正二年三月廿二日  
在齊齊哈爾  
領事館事務代理吉原大藏

機密第二九號

大正二年十二月十一日

在齊齊哈爾  
領事館事務代理吉原大藏

外務大臣男爵牧野伸顯殿

呼倫貝爾管內ニ於ケル蒙古人ト  
露國人トノ契約ニ關シ報告ノ件

本月十日當地露國領事「ア」ア「ナ」シ「エ」  
ト會見ノ際同領事ハ呼倫貝爾カ露  
支協約範圍内ニアラサルヲ以テ早晚  
支那側ノ管轄ニ歸スヘク然ル上ハ  
該地獨立中ニ露國人カ蒙古側  
ヨリ獲得シタル金鑛採掘權、漁業  
權、森林採伐權等ハ支那側ニ於テ  
容易ニ承認セサルハクモ昨年該  
地獨立ノ際支那官憲ハ該地ニ於ケル  
支那ノ主權ニ關係シ又ハ公産ノ處  
分ニ關シ蒙古人ト外國人トノ間ニ訂  
結シタル契約ハ無効ト認ムル旨照  
會シ来リタルコト「ア」以テ（明治四十五  
年四月二日附公信第三三號）  
爾來該地ニ於ケル露蒙人間ノ契約ハ  
同領事ニ於テ公認ハ為シ居ラサリシ

在齊齊哈爾日本帝國領事館

大正二年三月廿二日  
在齊齊哈爾  
領事館事務代理吉原大藏

67  
67  
23

2-0060

0354

最近在北京露國公使ヨリ該地ハ  
於ケル自國人ノ權利ハ保護スヘキ旨  
訓電ニ接シ如何ニ處置スヘキヤニ  
關シ甚ク難澁シ居シ尤モ該地獨立  
中露蒙人間ノ契約ニ關シ縱令支那側  
ノ承認ヲ得ントスルモ該地ニ支那側  
憲無カリシテ如何セシ結局支那側  
ニ該契約全部ヲ承認セシムルカ又ハ  
賠償セシムルノ外無カルベシト語レリ  
同領事ハ本月十一日當地出發、海拉爾  
ニ赴ケリ多ク右記談話事項ニ關シ  
該地露國副領事及海拉爾政廳  
總管勝福等ト商議ノ用向ナルニ

在齊齊哈爾日本帝國領事館

ト察セラル  
右為御参考及報告候 敬具

本信函送附先  
在支公使、奉天總領事、哈爾濱總領  
事、關東都督

(大東小紙又十五番)

68

18

下元

多美子

北条、唯事

皇太后使

一

被受6535

次

呼倫貝爾問題進達件

大正三年十月十六日關東都督府陸軍參謀長福田雅太郎

外務次官松井慶四郎殿

別冊呼倫貝爾問題及進達候也

附屬書類添附

正統年書

二一五

駐政務

又

廣田

位

2-0060

0356

秘

大正三年十月十六日 關東都督府陸軍參謀部

呼倫貝爾問題

2-0060

0357

### 呼倫貝爾問題

露支協約ニ依リ滿蒙方面ニ於テ吾人ノ特ニ注  
意ヲ喚起スルヲ要スルモノハ呼倫貝爾問題ナリトス  
而シテ呼倫貝爾、未タ多ク世人ノ研鑽ヲ經サル地  
方ニ屬スルヲ以テ先ツ之カ地理及經濟的ノ一般ノ狀  
況ヲ敘スルコトハ本問題ノ研究上強ク無要ニ非サ  
ルヘシ

呼倫貝爾又巴爾虎ト稱ス黑龍江省ノ一部ニシテ  
興安嶺以西露領西伯利ニ接スル地域ヲ占ム露  
國「バラノフ」中佐ノ調査ニ據ルニ其面積約十五萬  
平方露里(即チ約一萬二千  
百餘方里)索倫額魯特「チフチン」  
アリヤルトオロチヨン「タウル」此等ノ諸種族ヨリ  
成リ其人口總數約三萬二千五百名(内「アリヤルト」族  
半數強ヲ占ム)  
ニシテ一平方露里ノ人口密度ハ僅ニ〇・二三人ノ割  
合ニ過キス住民中「アリヤルト」及額魯特ノ兩  
族ハ喇嘛教ヲ奉シ索倫「チフチン」族ハ「シヤマン」  
教ヲ奉ス生業ハ大半牧畜ニシテ唯「オロチン」ノ  
全部及索倫族ノ一部ハ狩獵ヲ業トス  
呼倫貝爾ノ全地域ハ殆ト耕作セラレスト云フモ  
大過ナシ然レトモ此地方カ黑龍江省ノ他地方ト

地味ニ於テ大ナル遜色ナキハ疑ナキ所ニシテ其未シ開  
墾セラレサル所以ハ民度ノ低キト遊牧民カ耕作ヲ以  
テ牧畜ノ敵トナシ之ヲ嫌悪スルカ爲メ外ナラス而  
シテ本地方自然ノ富源トシテ譽クハモモハ魚族水  
禽野禽野獸ノ豊富ナルコト並ニ森林及地下鑛  
産ノ少ナカラサル事ニシテ要スルニ呼倫貝爾ハ土地  
曠ク人少ク天産モ亦乏シカラス殖民地トシテ有望  
ノ地方タルコトヲ疑ハス  
抑モ現時ニ於ケル呼倫貝爾ノ獨立カ原ト露國ノ使  
啖ニ依リテ企テラレ露國軍隊ノ直接間接ノ援助  
ニ依リテ成立シ露國ノ局外中立及東清鐵道保護  
ナル好名目ニ依リテ支那ノ討伐ヲ免レ現状ヲ維持  
シツハアルノ事實ハ敢テ贅言ヲ要セサルヘシ然ルニ  
翻テ獨立後ニ於ケル露國ノ呼倫貝爾ニ對スル政  
策ヲ見ルニ大体ニ於テ頗ル靜穩ニシテ扎賚諾爾  
炭坑担保ノ借款吉拉林金鑛ノ租借經營呼  
倫及貝爾兩湖並ニ該地方ノ河川ニ於ケル漁業權  
ノ獲得滿洲里ニ於ケル蒙古定期市場ノ設置  
海拉爾領事館ノ新設等ノ事實アリシモ未シ積  
極的經略ノ歩武ヲ進メサル事實ノ證明スル所ニシ

テ其因テ然ル所以ノモ、ハ蓋シ巴爾幹及外蒙問  
題ニ依リテ露國外務省カ其力ヲ極東ニ用フルニ  
便ナラサル事情アリシト東蒙ニ於ケル露國ノ活  
動ハ動モスレハ隣強日本ノ東蒙經營ヲ活潑ナ  
ラシムル口實ヲ提供スルコトニ想倒セル結果ニ  
外ナラサルヘシ斯クテ呼倫貝爾獨立以來將ニ  
年ニ垂ントスルモ露國ノ經營ハ未タ大ニ見ルヘキモ  
ナク而シテ此間蒙古自體ニ於テ何等刮目  
スヘキ變化ナカリシハ外部ノ刺激ヲ受クルコトナク  
シテ自發的ニ活動スルコトナキ未開人種ノ狀態  
トシテハ寔モ怪ムヲ用ヒサルナリ唯本年ニ入り外蒙  
問題露支兩國間ノ繫争ヲ紛糾セシムルアリ  
露國ノ教唆及援助アリト信スヘキ蒙古軍外  
蒙南境ニ出動スルヤ呼倫貝爾モ亦外蒙聯  
邦ニ部トシテ活佛ノ命ニ後ヒ現ニ成德ヲシテ  
一部ノ兵ヲ率ヒ外蒙軍ヲ援助セシメツ、アリ  
其他海拉爾ニ於テ一部軍隊ノ募集ヲ行ヒ  
ツ、アル跡アルモ事態ハ未タ大局ニ影響スル所  
ナシ以上之ヲ既往ニ於ケル呼倫貝爾ノ狀態ト  
ス



然ルニ茲ニ者過スヘカラサル一大事實ノ發生セル  
アリ他ナシ露支協約ノ締結ニ由リ新ニ生セント  
スル事件之レナリ本協約ノ内容ニ未ク審ニセス  
ト雖モ外間傳フル所ノ如クニハ喀爾喀四部並  
ニ科布多地方一帯ハ事實上露國ノ保護領  
ト化セルモノニシテ其結果現ニ交戰中ナル支蒙  
西政府ノ間ハ或ハ露國ノ調停ニ依リテ早晩和  
解スヘキコトナル可キモ之ニ反シテ協約ノ條  
國外ニ摘出セラレ而モ現ニ露國ノ事實上保  
護ニ依リテ僅ニ獨立ノ名ヲ保テル呼倫貝爾ノ  
立場ハ今後第二ノ外蒙トシテ露支兩國間將  
來ノ繫争問題ヲ生セン然リ而シテ極東經  
略ニ對シテ寸時モ休止スルコトナキ露國カ事實  
上ノ保護領タル呼倫貝爾ヲ放棄スヘシトハ到  
底思料シ得サル所ニシテ活佛政府ハ別様ノ見  
地ヨリ其聯邦ノ一ヲ支那ニ委スルヲ喜フ筈ナク  
又呼倫貝爾蒙古人カ宗教及人種ノ關係上  
活佛政府ノ西羈絆ヲ脱シテ支那ニ復歸スル  
ヲ喜ハサルコトハ想察ニ難カラストナス後テ今後  
ニ於ケル呼倫貝爾ノ問題ハ外蒙同様ノ紛糾ヲ

重スヘク之カ解決ノ為メニ現ニ外蒙南境ニ於テ  
行ハレツアルカ如キ手段ノ再演セラレニ保シ難  
シ然ルニ呼倫貝爾ハ我勢圏ト一部相接スル相  
隣ノ地理的關係ニ在ルヲ以テ事態此ニ至ラハ  
我勢圏ハ勢ヒ支蒙兩軍ノ蹂躪スル所トナリ  
其結果支那軍ノ不利ニ歸センカ我勢圏中  
ノ蒙古地帯ハ活佛ノ勢力下ニ歸趨シ茲ニ曰  
露兩國間再ヒ困難ナル外交問題ヲ惹起スル  
ニ至ラン吾人カ呼倫貝爾ノ消長盛衰ニ深大ノ  
注意ヲ拂フト共ニ之カ準備對抗ノ策ヲ研究  
スルノ必要ナルハ實ニ茲ニ存ス本月二日海拉爾發ノ  
報ニ依テ總管勝福ハ現ニ海拉爾舊市街居  
住支那人ノ檢舉ヲ行ヒ浮浪不審ノ人物ヲ悉ク  
放逐スヘキコトヲ公告シ為メ今地在留支那人  
間ニ大恐慌ヲ來シ數百ノ浮浪者博徒等ハ  
行李匆匆露國鐵道附屬地ニ避難シ舊市街  
ニ蒙古人ノ外僅ニ支那商人ノ一部残留スルノミ  
トナレリ而シテ事ノ茲ニ至レルハ十一月二十九日支那  
人總管衙門ニ至リテ封書ヲ殘シ去レルカ書  
面内ニ近ク支那兵數千海拉爾ヲ襲ヒ勝福

五

ヲ縛シ呼倫貝爾ヲ回復スヘシトノ句アリ勝福ノ  
恐怖ト憤怒トヲ激成シタル結果ナリト云フ斯  
カル悪戯カ何人ノ使族ニ依リテ企畫セラレシヤ  
ハ誓フ措テ問ハサルモ露國カ此等浮浪支那  
人ヲ其附屬地内ニ止メ置クヘシトハ固ヨリ信ヤラ  
レサル所ニシテ其結果ハ呼倫貝爾地境ヨリ多  
數支那人ヲ放逐スルコトナリ其代リニ入リ来ル  
ヘキハ露國人ヲ措テ他ヲカルヘキヲ以テ換言スレ  
、今回ノ浮浪支那人ノ放逐ハ露國勢カノ扶  
殖ヲ意味シ上述呼倫貝爾問題發生ノ曉ニ  
於ケル露國ノ主張ヲ益々鞏固ナラシムルノ結果  
ヲ生セン

協

支書課長

大正二年三月廿一日

大正二年三月廿一日

警務局

第一課

26



機密第五七號

大正二年十二月十七日

在哈爾濱

總領事 本多熊太郎



第6568號

九月

外務大臣男爵牧野伸顯殿

機密送第 三號

呼倫貝爾(巴爾喀)ニ對スル

露國ノ内意並ニ露人ノ經營ニ

關スル件

呼倫貝爾獨立ノ現状並ニ之ニ關スル露國ノ意向ニ付テハ既往累次ノ報告ニ依

リ御明悉ノ通ニ有之候處ノ一ツオエウレミ  
ヤ通信員カ最近本社ヨリ内報ヲ受  
ケタル露國外務省極東課長カザコフ  
氏ノ意見ヨリトテ杉野書記生ニ漏告  
セル所ハ此際參考ニ資スレキモノ有之  
様被存候即チ右「カ」氏ノ意見ハ呼  
倫貝爾ニ關シテハ露國ハ當分現在ノ  
状態ニ一任シ置クヲ可トス現在ノ儘ニ  
テモ呼倫貝爾ハ事實上露國ノ権域ニ  
屬シ露國ノ地歩ハ益々鞏固ニ擴充  
サレツツアリ外蒙ノ事態カ今猶解決  
ノ途中ニアルノ際呼倫貝爾ニ對シ形式  
上ノ解決ヲ取急シカ如キハ策ノ得タル

モ、ニ非スト去フニ有之趣ニ候尚ホ呼倫貝爾地方目下ノ状態ニ關シ前記通信員ノ談話要領ハ左ノ通ニ有之

呼倫貝爾ハ引續キ、庫倫政府ノ旨ヲ朕奪シ專ラ露國、後援ヲ憑恃シテ獨立ヲ持續シツツアリ從テ呼倫貝爾政府總監ハ一、意、露人ヲ歡迎待シ地方一帯ノ利權、如キ惜氣モナク露人ニ附與シツツアリ吉拉林金礦ハ夙ニ露人「クラーエフ」ニ貸與セラレ居ルカ右以外ニモ露人ノ採掘權ヲ獲タル金礦十一箇處アリ其他森林伐採、烏爾順河（呼倫湖間、貝爾湖間）

（河流）漢撈ノ利權モ亦露人ヲ露人

ノ經營ニ歸シ居レリ（興安嶺以西東清

スル北ノ諸滿炭坑カ從前ヨリ露國ノ手ニアルハ去ラマテモナシ）

呼倫貝爾獨立以前該地方ニ於ケル

露人ノ取引額、年額、百萬留内外ナリシカ

獨立以後纔カニ二箇年ナラサルニ其

ノ額激増シテ今ヤ百萬留以上ニ達

シ居レリ、蒙古ノ南門タル張家口ハ

蒙支間時局ノ為メ閉鎖セラレ該方

面ヨリ蒙古ニ對スル外國及支那物

産ノ輸入ハ杜絶シ居ルニ反シ、蒙古

ノ北門タル海拉爾ハ依然トシテ開放

セ居リ、東清鐵道ニ依ル内外貨物

ハ  
カ  
カ  
カ

ハ海拉爾ヨリ北蒙ノ多倫諾爾ト  
稱セラレル甘珠寺ヲ經テ普ク蒙  
古ノ内地ニ分布セラレツツアリ殊ニ露  
國製品ノ販路ハ著シク擴張セラレ  
ツツアリ

額爾古納河左岸(後貝加爾側)所在  
ノ胡索克兵村ハ從前ヨリ右對岸  
呼倫貝爾ノ地ニ侵入シテ牧草及薪  
材ヲ採取スルヲ常トシ從テ呼倫貝  
爾獨立以前ニ於テハ之カ爲メ露支  
間ノ衝突絶間ナカリシカ同地方獨  
立以來巴爾喀人ト胡索克兵トノ  
間至極圓滑ニシテ兩國ノ境畧ハ事

實存在セサルト同様ノ現象トナレリ  
云々

呼倫貝爾現下ノ情勢ハ大要右ノ通有之  
同地方ノ獨立カ露國ニ與フルノ利益ハ經  
濟上ノ一照ノミヨリ云フモ隨分多大ナル  
コト斯ク事實ニ證明セラレ來ルト共ニ  
呼倫貝爾保持ニ關スル露人ノ意氣以  
益々鞏固ヲ加ヘツツアリ既ニコトニソフ上  
院議員ノ如キモ露國政府カ今猶呼  
倫貝爾自主ノ承認ヲ與ヘサルコトヲ攻  
撃シツツアル様ノ次第ニ有之(別信機密第  
五六號参照)  
旁以テ露國カ黑龍江省ノ一部トシテ  
該地方ヲ支那ニ復歸ヲ許容スルカ如

キハ他ニ一層急切又ハ重大ノ關係アル  
政界上ノ必要ニ遭遇セサル限り先次テ  
想像シ得ラレサル所ニ有之現下同政  
府ノ採リツツアル消極的態度ハ全クカガ  
コラレ氏内話ノ通り政策上ノ計算ニ出テ  
タル一時ノ權略ニ外ナラサルコト殆ト寸疑  
ノ餘地ナシト思考致候最近ノ機密拙  
報ニ關聯シ右御参考ノ一端マテ茲ニ  
及報告候ノ發具

本信馬送付先

山座駐支分使、落合奉天領事、  
吉原齋々噺事務代理、福島關東都督

格

電信課長

大臣

六七二

暗

長春發 大正三年五月廿五日  
本省著 大正三年五月廿五日

木部領事

牧野 外務大臣

第一七五號

次官 政務 長

通商

人事

會計

文書

本多 總領事ヨリ

哈爾濱觀察使、内話ニ依リ、同月廿三日ホルワフ上將軍ト會見シ、呼倫貝爾

ヲ黑龍江省ノ一部トシテ支那ニ恢復スル

コトハ露國ニ於テ果シテ異議アルヘキヤト

尋ネタルニ將軍ハ本件ニ関スル本國政府ノ

意向ハ自分ニ於テ全然兼知スル所ナラシ

伏乞先考

70/23

何等憶説ヲ試ムルヲ得ス但シ同地蒙古人ニ

シテ支那ノ他地方ニ對シ不協ノ行動ニ出ル

カ如キコトアル場合ニハ露國ニ於テ此レテ之ヲ

禁壓スヘキト夫ハ自分ヨリ明言シ差支ナシ

ト存タル趣ナリ、ノリオ、ウレ、ニヤ、通信員ノ

内話ニ依リ、ホルワフ上將軍ハ右觀察使ノ

来談ヲ以テ支那政府、内年、ヨリ呼倫貝

爾處分ニ関スル露國ノ意向ヲ探知スルノ

目的ニ出テタルモノト認リ、蓋テ支那駐在露

國公使ニ電報シタルニ公使ヨリハ時ニ即

2-0060

0368



有益ノ消息ナリトテ感謝ノ回電アリタリト  
云フ惟フニ支那政府ハ庫倫側ノ野心ニ鑑  
ミ露支協約豫定ノ三國會議内催前出  
未得トシテハ露國政府ト同ニ呼倫貝爾  
復内題ヲ解決シ望カントノ希望ヲ以テ月  
下(不明)ナルモノノ如シ  
高觀察使ノ談ニ依レハ前記三國會議  
ノ協定ハ恰克圖ト決定シ支那ヨリ派遣  
ノ全權ハ畢桂芳(本年夏齊齊哈爾事  
件以後黑龍江都督タリ目下上京中)

ト内定シ居レリト云フ同人ニテハ全ク露國ノ  
傀儡ニ過キス會議ノ成行モ豫想難  
カラスト觀察使ハ憤慨シ居リタリ  
右在支子使、轉電セリ

御

大正三年一月 七日 接受

駐露公使館 第一課

公第 二〇四号

大正三年 拾二月 拾五日

在露路

臨時代理大使 田付 七夫

外務大臣 野村 胡堂 殿

馬送行 大正三年

蒙 古 使 節 閣 下 件

庫倫政府ノ總理大臣三音諾顏汗及司法大臣  
烏素玉ノ五トスル蒙古使節一行ニ拾九名ニ上  
月十七日彼得堡ニ到着露路國官内者ノ指定  
旅費ノシラレドホタルニ滞留中ノ延首相外相  
其他蒙古ノ政治上經濟上之接点ノ關係ヲ有  
スル重要ナル臣士憲ノ訪問シ今月廿五日外務省極東  
課長カガコヲ女附原ヒリロカヤシノ離官ニ赴キ  
露路皇ノ謁見蒙古ノ古器物等ヲ携皇ノ露  
皇ヲハ三音汗以下ニ夫々叙章ノ由有之十二  
月二日西ヒ各地ノ帰着致ム

在露國日本大使館

71

71  
ス

蒙古  
使節

馬送行

00548號

一、序ノ以テ夫レトナク問訊ニタシテ亦之有之ム  
知者有之秘シク多ク語ルニ欲セズ然レニ日取  
直都下各新聞紙、現レタル其扶助ヲ偏シタ  
ルシキ情報、概シテ今使節ノリロカヤシノ向  
テ出者前外相サゾノノ氏、一ノ謁見書ヲ交附  
シタル趣ニシテ其ノ書ニ「(一)蒙古政府ノ必要  
ナル金トシテ五百萬兩借入申入ノ件(二)  
蒙古軍隊、対シ兵ヲ買ハノ供給並ニ軍隊教

2-0060

0370

官増徴ノ件ニ露蒙ノ貿易関係者展ノ  
露國主務者ニ於テ相當補助借与ノ件等  
記載シアルヤ有之ル而シテ之ノ対シ外務省  
側ニテ前記三件ノ中借款締結ノ事トハ之  
ノ承諾シ目下其担保ニ就テ研究中ノ由  
ナニモ兵器ノ供給教官増徴ノ事トハ直接  
陸軍省ニ於テ關係有之ルヲ以テ外務省  
ヨリ陸相ニ交渉スルコトナシ且後ノ案件ノ  
ル露蒙貿易發展ノ事ニ露國高工者  
ノ所見トモ全無合致スル付本件ノ内閣  
ハ否者有之出来得ルニテテ蒙古人ノ便宜  
供与スルコト決山之シル方回答シテ之知有之  
ハ

日本外務省

使節ノ當地滞在申上費業專ノ視察等  
内閣特ニ民間側ニテ斡旋ノ務ヲ執ル  
露國輸出貿易會議所ニテ新開ノ所  
被ニ於テ本月十日令會議所長上院  
議員ジニソフ氏令會議所ニ於テ使  
節一行ノ名譽表章ノ為ニ特ニ臨時大  
會並ニ宴會ノ開テ上院議員アルモ  
氏(前農務大臣)トホリスル及エモ  
露國出下院議員、蒙古方面ノ探検  
有之ルカズロフ大佐、日務、交通、高工各  
者代表者其他之ニ於テ會議所ノ有  
令會議所折リテニソフ氏令會議所ノ  
以テ使節即驛途ノ辭ヲ述、露蒙交通高

2-0060

0371

自係ノ者展カ兩國ニ取リ極メク重要ナル意  
ヲ我ノ有ルニトシテ指摘シ之ニ對シ三考行及  
烏露五ノ接接アリシカ其ノ内ニ何レモ露  
國ノ勢力カ範圍カ内蒙タルニ及ハントナリ  
シマシムルノ意味アリシ由シム尚今議場ニ  
於テ兩路國ノ蒙古郵便電信事業ヲ經營  
シ内レ郵便本部長ニ準倫恰克圖同  
ニ郵便自動車運轉ニ関スル条約ノ  
締結セラルト今郵便車ハ一週三四往復  
スルコト郵便物ノ料金ハ兩路國內地ノ規定  
ニ準ルコト又露國ノ電信線ハカシムアカ左  
ヨリ科布多スコカ架設中ニ在ルコト今露  
信務ニ三拾年後蒙古政府ニ於テ買収シ得  
ルコト等ノ述、更ニ露國カ將來蒙古ニ於テ同  
際的ニ郵便事務ノ振興スルコト力或ハ公事業  
務ノ蒙古人々ニ與テセシムルコトノ問題ニ就  
テ目下ノトコニ其方針確定セストノ意味ヲ  
附加シ交通者代表者ハ蒙古ノ水路ハ全  
部踏査スルコト水路國ノ調制不セラルコト  
ハイスキル街道ノ安易似テ徑事スルコト  
於テ同鐵道ニ事リ近キ將來ニ於テ吾  
年々ハハコトノ述、蒙古本部長ハ内務  
省カ蒙古ノ畜産ノ兩路國輸入ヲ安全ナク  
ルコト防トシテ蒙古ノ畜産ノ蒙古國ニ擴張  
スルコト且蒙古政府ニ對シテ多量ノ防疫法ノ勵  
行ヲ勸告スルコト決シアリト述、ハ蒙古

使節即、露國あるに於て庫倫、烏里雅蘇  
 台、科布多及巴爾喀什(海拉爾)ニ獸醫駐  
 在所ヲ設置シ令駐在スルケレタ。傍々蒙古  
 人、獸醫術ヲ傳習セシムルノ方法ヲ責ミ  
 オコト庫倫、托素露國獸疫試驗所ヲ設  
 置シ防疫施設ニ從事セシメタキコト等ノ希望  
 ヲ述、更に内外蒙各總一ノ希望ヲ繰返シ若  
 シ目下ノ事情政治上之ヲ望ムコトハ能ハストモ  
 必要トモ經濟上ニ合用セラレザル一カラスト  
 述、以テ依テ令會議所ハ蒙古代表者ノ希  
 望、夫々實現セラルルノ様盡力スレトシ法儀  
 ヲナシ之ヲ會議議決スルリ更ニ莫合會ニ移リ  
 露蒙家親近ニ因リる數書ノ上上演説アリ  
 散會セシムル處有之  
 高使節一行ノ滞在ニ今後一週向テ出アサレ  
 ン途次莫斯科ノ之ニ寄リ會々たテ工部局  
 家ト意見見テ交換シ歸蒙家ノ途ニ就テ  
 條定ニナリリコト有之  
 右ノ事日若電報ナリ。九号ノ證明書々々  
 考査及報告等致具

水

以  
密

大正  
三年一月八日

上管

八日

機密送第三號

送

特聖大臣

機密送第四號

送

特聖大臣

機密送第一號

送

特聖大臣

呼係只兩問散送付件

外務省

閣下為財付陸軍部、納查、係、

呼係只兩問散、寫、為、分、身、

首、及、分、送、付、下、月、查、閱、者、成、反、

考、中、力、了、也、

閣下為財付三二五号、以、分、身、

大正三年一月八日  
陸軍部  
陸軍省  
陸軍大臣  
陸軍少将  
陸軍中將  
陸軍大佐  
陸軍少佐  
陸軍中尉  
陸軍少尉  
陸軍大士  
陸軍少士  
陸軍大士  
陸軍少士

2-0060

0374

協

大月

内史

72

72

23

被受0303 號

大正三年壹月拾叁日發受

駐政務局 法 第一課

大正三年十二月廿日

在露

臨時代理大使田村七郎

改務向長小池張造殿

相好時以差、以信詳、以好身、以好  
 名、以好操、以好身、以好身、以好  
 者、以好操、以好身、以好身、以好  
 東、以好操、以好身、以好身、以好  
 身、以好操、以好身、以好身、以好  
 係、以好操、以好身、以好身、以好  
 功、以好操、以好身、以好身、以好

在露 田村七郎

是ガカリレ所、有る、以好身、以好  
 以、以好操、以好身、以好身、以好  
 秀、以好操、以好身、以好身、以好  
 ノ、以好操、以好身、以好身、以好  
 ナ、以好操、以好身、以好身、以好  
 打、以好操、以好身、以好身、以好  
 内、以好操、以好身、以好身、以好  
 ル、以好操、以好身、以好身、以好  
 云、以好操、以好身、以好身、以好  
 他、以好操、以好身、以好身、以好  
 疑、以好操、以好身、以好身、以好  
 毛、以好操、以好身、以好身、以好  
 今、以好操、以好身、以好身、以好

ノコトヲ知ル

内ガ蒙古兵隊成ラサレハ、外務南面者ノ云  
ハル如ク果シテ蒙古支ノ百部ニ干戈絶エサ  
ルハキカ甚疑ナキ能ハサル所ニ有之ハ支那カ  
久シク蒙古ト干戈ヲ交フルハ支那ノ若者ト  
スル所ナリ現ニ外務南面者ノ話ニ依ルニ蒙  
古ノ若者ハ蒙古支宜言ノ急速調印ヲ見ルニ  
至リテハ内務古ニ於ケル蒙古支西軍ノ  
交戦ヲ速ニ決想セシムトモ支那ノ起程  
ニ基キテモモシテ右宜言調印ノ結果  
支那ノ切ニ蒙古ノ役ノ所ナリ之カ爲  
蒙古ニ至リテ其ノ軍ヲ内務内ニ引揚ル  
ニトモ同意シルニモ不審ニシテ其ノ際支那軍

在露國日本大使館

カ内務古ニ於テ兩軍人虐殺ヲ行ヒシカハ更  
蒙古兵ノ凶悪ヲ知ヤ今ニ至リテ引揚  
実行シ以カト云テ一方ニ於テ支那ノ同  
事毎ニ支那ノ驕心ヲ得ハトカソツツル  
態ニ鑑ミントキハ支那カ兵器彈藥ヲ  
中分ニ蒙古ニ供給シ支那ノ利益ヲ窮地  
論ラシムルカ如キ事ト出スヤ疑ヒキ現  
有之ハ現ニ新ニ成立シ見三百万留保款ノ  
使途ニ算シ最重ノ監督ヲ附シ一歩  
トモ外務ニ流用スルヲ許ササルハシトハ言  
ハク

若又内ガ蒙古兵隊成ラサレハ、外務南面者ノ云  
之ヲ知ルハ其ノ際支那ノ若者ヲ後ケルカ



支那

支那ノ強心ヲ失フニシテ支那ノ上ニシテハ其ノ力甚古ノ  
強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修

右ノ事情ニ基キ爾國ノ強古ノ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修

右ノ事情ニ基キ爾國ノ強古ノ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修

在露國日本大使館

ルシテアラサヤトモ疑ハシ且本年一月ニテ百  
方ニ來ル支那ノ一八号ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修  
治ニシテ其ノ力甚古ノ強心ヲ失フニシテ其ノ人一般ニ兵勇ヲ修



百三或ハ川流キ招致シ重ネツツアヤ否ヤ  
 之ヲ審ニセトモ我ガ政府ハ其ノ國チ  
 之ハ此ナシ又米大業我ガ工コフツク  
 小島ノ鉄道ハ資本ヲ抱入スエトニ  
 他對ニ及ビテ目ハ其ノ大任カ彼生  
 一諸路ヲ認可スルハ南都西比利鐵  
 道(古古)一五頁參照)ニシテ其地  
 西比利中央亞細亞國チ上中亞細亞  
 道エヨリ有トシテ勢ヲ是ニ依留シ  
 全ク我ガ善者最ニコソツクハ自ラ  
 已望ニ其ト交情ニ見レ僅ニ五條法  
 ノ借頭ヲ的ルニエトクハ見ルニ鐵道  
 在露國日本大使館

北滿鐵道ノ如キハ副都長官大任  
 諸ノハハエト鐵道カルニトモ其ノ保  
 夫ノ滿南府鐵道ノ如キハ我ガ支  
 本動トシテ大ニ者國カ其者局者  
 ニ利便ヲ与ヘルヲ以テ其ノ保  
 注意ヲ要スルニトモ其ノ保  
 右ノ方ハ其ノ保夫ノ保夫ノ保夫  
 之保夫ノ保夫ノ保夫ノ保夫  
 此ノ中保夫ノ保夫

第一東段の歩み

文書

大正三年一月十一日 接受

7

大正三年一月拾日 接受

雙葉

第 二 課

機密往第 三 六 号

大正二年十二月二十六日

在 席

臨時代理大使 日付 七 奉

外務大臣 男爵 牧野伸顯殿

73 23 急

秘史 0304 號

皮友

大正三年一月廿九日

馬送付員

北

不

馬

在露國日本大使館

當る者、本官に諸君に依りて右の同使節が内外  
 露台の合併を熱望し之を確認する露國政府の  
 迎へに同政府は日本を希望し願ひ今日迄断然  
 之を拒絶し来りたるに基り由り有之矣然るに  
 見玉某(南滿鐵道公社員ナリト云フ)ナルモノ  
 曩、庫倫に至り露台當路者ト会谈し其会  
 談要領ナルモノ内容に當國外務當局者ノ入手  
 見所ト爲り之に據りて見玉某ハ日本に能  
 近處に親密な關係ヲ結ば度希望ヲ有スルモ  
 ノナルカ如キ事ヲ述(鐵道ノコンセンションヲ得シ  
 コトヲ力メタルヤニテ之カ爲大ニ露台當路者ノ心  
 ヲ動カシ露國ニシテ内外露台合併ノ願ハ露台ノ  
 希望ヲ容レサルニ於テハ日露直接ノ折衝ニテ以

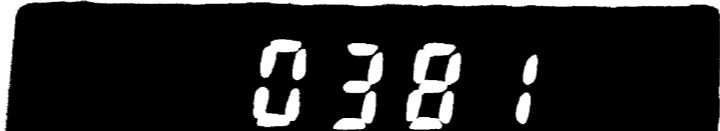
此の件存  
あり  
セル  
アリ

蒙古處分ヲ決スルニ如カエト乃シ遂ニ今回日本  
 皇帝陛下ニ宛テタル日本使節庫倫簡派  
 請求ニ因ル活佛ノ親東ヲ日本政府ニ傳達  
 方露國政府ニ依頼シ同政府ハ已ムヲ得ヌ右親  
 東ト同時ニ前記見玉果ノ合談要領ヲ本使  
 ヲ以テ在東京露國大使ニ送付シ日本政府ニ  
 傳達方ヲ訓令セセル由ニ有之矣  
 右ニ就キ露國當局者ハ高附言シテ今日迄内外  
 露否合併ノ提議ニ對シ露國力斷然之ニ反對  
 シ未リタルハ露國ノ力ヨリモ寧ロ日本政府ノ希  
 望ニ對テカマニ外ナラザリシ次第ナルカ前記見玉  
 某ノ所言ハ(見玉某ノ任置タル特等ニ領事ナリ  
 又精査スルエトモセヌ)深ク蒙古當局者ノ心ニ確信  
 在露國日本大使館  
 ヲ與ヘ今ヤ露國ハ板垣ニシテ女トアリ反テ蒙古ノ  
 反感ヲ買フニ至リタリ日本政府ハ無論蒙古ノ提  
 議ニ應諾セラルルニトハナカルヘシト強ク本國境  
 界劃定會議ニ於テハ蒙古ヨリハ劈頭第一本國  
 題ヲ提議スヘキハ明白ニシテ露國ハ之ニ對シ今ヨリ  
 苦慮シ居ル次第ナリト述ベルニ付本館ハ之ニ對シ  
 支那ニ素素ヨリ内外蒙古合併ニ付テハ反對ナルハキ  
 ニ付露支相一致シテ蒙古ニ當ラハ可ナラスヤト申奏  
 友在スレハ支蒙ノ感情ハ益非離シ蒙在ハ兵  
 カヲ以テ内露ヲ併有ノ冀ヲ夢ケントシテ少クトモ  
 内外蒙古境上永ク平和ヲ保ツコト能ハサルハ是  
 支那政府ノ最モ苦痛トスルニ至ラレシト云ヒ信奏  
 之ヲ要スルニ見玉某ノ行動ハ痛ク露國政府ノ不快



拓キタルカ如ク一方國境問題ニ因シ露國ハ日支西  
 國ニ對スル關係上頗ル苦心シツアル如ク相見ハ遂  
 ニ前記書東ノ取次スラ之ヲ餘儀ナリセルニ至リタ  
 ンマ、如クニ被審矣  
 南布施ヲ蒙テ使節ハ累次合談ヨリ得タル感想  
 トシテ總ル所ニ依レハ露國ハ今ヤ露國ニ飽キテ日  
 本ニ頼ラントスルカ如キ觀テルニ使節ノ言動頗  
 ル雅氣ヲ帯ヒ依リテ餘リ真面目ニ大事ヲ語ルニ  
 足ラカカ如ク相見ハ委由ニ有之尚使節中  
 烏泰王ノ如クハ北南存鐵道敷地中ニ同人ノ  
 私有地アリテ支那カ蒙古ニ計ルコトナク櫻リニ在  
 敷設權ヲ日本ニ與ヘタルハ不當ナリト憤慨シ居  
 ル由ニ有之矣尤モ鐵道敷設ノコトハ蒙古開港  
 上最モ必要ナリトシテ之ヲ認メ日本ニシテ蒙テ右様ヲ  
 與ルレハ喜ヒテ日本ニ鐵道ノヲコンセツシヨシヤ典之  
 カ開發ニ任セシメオモ支那カ國典スルコトハ全然  
 之ヲ許容スルヲ得スト言ヒ所ん由ニ有之矣  
 右中參考近申進矣敬具

在露國日本大使館



74

74  
23

大正三年 正月廿九日  
第 〇 三 〇 五 號

機密 第三七号  
大正三年十二月廿七日

在露

臨時代理大使 田付七春

外務大臣 野村 胡堂

馬送付 大正三年

當地滞在 中ノ蒙古使節ニ書諾額汗ヨリ露國政府ニ申込ニシタル第二次借款ノ義ニ因シテ

是迄今使節ノ因ニテ蒙古使節中申進ノ四五ノ内中モ有之ル處其後當地諸新聞ノ記載スル處、概シテ今次蒙古ノ起債額ハ三百萬兩ニシテ露國首相ニツツオラセ、熱心、蒙古使節ノ希冀ニ支持シ居ルハ近日借款締結ノ運ト可相成而シテ、該金額、若干期間、於テ數回、合テ之ヲ貸与シ重要ナル政務ノ改革費ニ充テラントシ、其細目等、附シテ在露國露路國外交事務官ニシテハトモ古政府トノ間ニ取極メラントシ、有之ルカ本件、因シテ本官カ外務當局ヨリ聽ク所、按シテ該借款(當馬)其金額ヲ明言スルハ露國ニ於テ強ク之ヲ引受クシトナリタリニ等一次借款ノ成行、堅シテ露國政府ヨリ之ニ對シテ、財政監督官ノ庫倫ニ駐在シ其ノ使途、既チ監、監督ノ加、重要ナル政

在露國日本大使館

2-0060

0382

6

號數0305 號

大正三年 壹月廿九日 禮拜

機密 第一

大正三年壹月拾叁日接受

大正三年壹月廿七日接受

駐政務官

機密 第三十七号

大正三年十二月廿七日

在露

臨時代理大使 田付七太

外務大臣 羅野仲顯 殿

馬送付 大正三年

關於露國借款之件

露地帯在中ノ露國使節三書諾願汗ヨリ露國政府ニ申込ニシテ第二回借款ノ至我ニ付シテ是迄今使節ニ付シテ報告中申進マシタル中其有之ニ處其後當地圖新聞ノ記載ニ處、最近今迄露國ノ起債額ハ三百萬兩ニシテ露國首相ニツツオラセ、熱心ニ露國使節ノ希望ヲ支持シ居リ、近日借款締結ノ軍ト可相成而シテ、資金金額、若干期間、於テ數回、合テ之ヲ貸与シ、重要ナル政務ノ改革費、充テラシムルニシテ、其細目等、附シテ在露露國外交事務員ニシテ、其ト露國政府トノ間ニ取極メラシムルコト、有之ルカ、本件、因シテ露國外務當局ヨリ聽ク所、按シテ、該借款(大當与)其金額ヲ明言スルハ露國ノ於テ強クシテ引受クニトナリ、且、其一次借款ノ成行、露國政府アリ、之ニ對シテ、財政監督官ノ軍備ニ駐在シ、其使在、上院ノ監督、監督ノ加、重要ナル政

在露國日本大使館

露國首相ニツツオラセ、熱心ニ露國使節ノ希望ヲ支持シ居リ、近日借款締結ノ軍ト可相成而シテ、資金金額、若干期間、於テ數回、合テ之ヲ貸与シ、重要ナル政務ノ改革費、充テラシムルニシテ、其細目等、附シテ在露露國外交事務員ニシテ、其ト露國政府トノ間ニ取極メラシムルコト、有之ルカ、本件、因シテ露國外務當局ヨリ聽ク所、按シテ、該借款(大當与)其金額ヲ明言スルハ露國ノ於テ強クシテ引受クニトナリ、且、其一次借款ノ成行、露國政府アリ、之ニ對シテ、財政監督官ノ軍備ニ駐在シ、其使在、上院ノ監督、監督ノ加、重要ナル政

2-0060

0383

書寫支弁ノ外蒙支間ノ戰費ニ決シテ之ヲ  
使用セシメヨ且一切旅費ノ取掃ノ万サレハ  
答テリトノコトニ有之ム  
有テ參考ニ此轉告中此矣敬具

在露國日本大使館



場。

内忌

大正  
75  
73  
00982

75

75

73

在文使  
在文使  
在文使

大正五年正月拾参日接受

公才二二二号

駐露公使 第一課

大正五年十二月廿六日

在文使  
臨時代理公使 田代七夫

外務大臣 田代 收 照 件 願 啟

在露公使 田代 收 照 件 願 啟  
十二月廿六日 公才二二二号 田代 收 照 件 願 啟  
十二月廿六日 公才二二二号 田代 收 照 件 願 啟

在露公使 田代 收 照 件 願 啟

在露公使 田代 收 照 件 願 啟  
十二月廿六日 公才二二二号 田代 收 照 件 願 啟  
十二月廿六日 公才二二二号 田代 收 照 件 願 啟

2-0060

0385

場。

内務省

大正  
陸軍省  
文書

第00982号

文書

文書

文書

文書

大正四年正月拾参日接受

駐露公使館

第一課

公才二三号

大正四年十二月二十六日

臨時代理公使田代七郎

外務省に送附書類送附

駐露公使館文書

十二月十五日付の公才二三四号の松信の

取附書類送附書類送附の件は十二月十五日

に付日本公使館に送附し、同日付の取附書類

送附し、同日付の取附書類送附の件は十二月

十五日に付日本公使館に送附し、同日付の取

附書類送附書類送附の件は十二月十五日に

付日本公使館に送附し、同日付の取附書類送

附書類送附書類送附の件は十二月十五日に

付日本公使館に送附し、同日付の取附書類送

附書類送附書類送附の件は十二月十五日に

付日本公使館に送附し、同日付の取附書類送

附書類送附書類送附の件は十二月十五日に

付日本公使館に送附し、同日付の取附書類送

在露公使館



2-0060

0387

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a manuscript or ledger. The text is written in a cursive style (sōsho) and is organized into approximately 15 vertical columns. The characters are dense and difficult to read without specialized knowledge of the specific dialect or context.

2-0060

0388

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a historical record or document. The text is written in a cursive style (sōsho) and is contained within a rectangular frame. The characters are densely packed and difficult to read due to the cursive nature and some fading.

あ

2-0060

0389

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a historical record or document. The text is written in a cursive style (sōsho) and is contained within a rectangular border. The characters are densely packed and difficult to read due to the high contrast and some ink bleed-through.

2-0060

0390

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a historical document or manuscript. The text is written in a cursive style (sōsho) and is organized into approximately 20 columns. The characters are dense and difficult to read without specialized knowledge of the historical script.

2-0060

0391



Handwritten text in German, written vertically in a cursive script. The text is organized into several columns, separated by vertical lines. The writing is dense and fills most of the right-hand page.

2-0060

0392



tersbourg, l'invitation au Gouvernement Chinois d'avoir à retirer  
les troupes qui ont envahi le territoire de la Mongolie Intérieure  
dont la population est intimement liée avec nous par affinités  
de race.

Vous voudrez bien, Monsieur l'Ambassadeur, faire part  
à Votre Gouvernement du contenu de ce mémoire et agréer l'assu-  
rance de ma haute considération.

Chargé de mission extraordinaire Président du Conseil  
des Ministres de Mongolie Sain-Noin-Khan Namnan-Souroun.

St. Pétersbourg, le jour du mois moyen d'hiver de  
la III<sup>e</sup> année de l'ère "Olan-argonjoknas" (Elu par tous).

2-0060

0393

de sa manière de voir par rapport de ces documents.

Le Gouvernement Mongol a pu constater avec la plus vive satisfaction que lesdits documents comportaient la sanction de la part de l'Empire de Russie et de la République Chinoise de l'indépendance de l'état Mongol, auquel était garantie pleine liberté dans toutes les affaires touchant à l'administration intérieure, au commerce, à l'industrie, aux lignes de chemin de fer et de télégraphe, et dans toutes les questions financières et économiques avec toutes les conséquences résultant de cet état de choses ainsi qu'une parfaite liberté de traiter amicalement avec d'autres états souverains. L'engagement formel pris par les Gouvernements de Russie et de Chine de ne point intervenir dans les affaires intérieures de la Mongolie, de ne point envoyer ni maintenir en Mongolie aucune force militaire, ni aucun agent administratif, de ne point recourir à la colonisation par leurs sujets du territoire de la Mongolie - constituée au point de vue du Gouvernement Mongol, une garantie sûre de l'indépendance de l'état Mongol.

Néanmoins le Gouvernement de Mongolie a cru de son devoir de rappeler aux Gouvernements de l'Empire de Russie et de la République Chinoise qu'il a toujours maintenu et maintient

encore que la Mongolie a rompu définitivement tous liens avec la Chine et qu'aucun droit de suzeraineté ne peut être reconnu à personne sur la Mongolie sans son approbation. En conséquence le Gouvernement Mongol se réserve une parfaite liberté d'appréciation touchant certains points de la déclaration et des notes diplomatiques ayant trait aux relations entre la Chine et la Mongolie. En particulier la Mongolie affirme son droit d'annexer les territoires qui ont toujours fait corps avec elle et à une telle délimitation de ses frontières qui comprendrait toutes les peuplades de race Mongol qui ont déjà adhéré à l'état Mongol. Sous ces réserves le Gouvernement de Mongolie se déclare prêt à prendre part aux pourparlers entre la Russie, la Chine et la Mongolie, prévus par la déclaration et les notes susindiquées.

De plus le Gouvernement de Mongolie, désireux de rétablir le plus tôt possible la bonne entente entre la Mongolie et les états limitrophes, a donné ordre à ses troupes de suspendre les opérations militaires contre les troupes chinoises et d'évacuer les positions avancées qu'elles occupaient et il a adressé en même temps, par l'intermédiaire du Ministre des Affaires Étrangères de Russie et du Ministre de Chine à St. Pé-

95  
11  
28

Traduction.

A Son Excellence

Monsieur l'Ambassadeur Extraordinaire et Plénipotentiaire  
de Sa Majesté l'Empereur du Japon.

Par la volonté de mon MAITRE, le Souverain de Mongolie,  
et de SON Gouvernement, je suis chargé, Monsieur l'Ambassadeur,  
de Vous faire part, à titre de renseignement, de ce qui suit.

Au moment de la chute de la dynastie Mandchoue à la  
quelle elle était liée par un pacte spéciale, la Mongolie, à  
l'effet de sauvegarder son unité et son indépendance nationales  
et l'intégrité de son territoire, se déclara état indépendant  
et souverain. Comme tel, elle a été reconnue par l'Empire li -  
mitrophe de Russie, qui a conclu avec elle à Ourga le 21 Octobre  
v.s. 1912 une convention politique et un protocole de commerce  
et maintenant Russie a signé à Pékin le 23 Octobre (5 Novembre)  
1913 une déclaration et un échange des notes concernant la  
Mongolie eut lieu entre les Gouvernements Russe et Chinois.

Après avoir examiné la déclaration et les notes sus -  
mentionnées, le Gouvernement Mongol fit part au Gouvernements  
Impérial de Russie et au Gouvernement de la République Chinoise

2-0060

0395

湯

3:

蒙古情報(露支)第一號

大正三年一月十五日

參謀本部

出

上

(秘)

一 露支協約の對する露國外務機關の意向

露國カ爾未著々外蒙ノ企業ヲ進メ牢固トシテ自己ノ  
勢力ヲ扶植シ一方陰ニ支那南紀軍ヲ支援シテ支那ヲ威  
赫シ終ニ多年ノ宿望ヲ達シテ蒙古ニ関シ露支條約ヲ  
締結セシハ吾人ノ熟知スル所ナリ、露國外務省機關新  
聞「ロシヤ」紙ハ十一月七日ノ社説ニ此條約成立ヲ論評セリ  
此所論固ヨリ露國外務省ノ真意ト看做ス能ハルモ少クモ  
其爲ニスル所アリテ敘説セシモノシルハ既性ニ徴シ察知スル  
ニ難カラズ左ニ之ヲ摘譯セン

岩倉

露支協約調印ニ関スル報道カ一般社會ヲ驚愕セシメ  
サリシハ故アル哉是レ蒙古問題ノ解決ニ関シ露支兩國  
間ニ交渉ヲ進行シテツラシハ既定ノ事實トシテ世人ノ熟  
知シテアリシ所ナレバナリ

此問題タルヤ我極東發展論者ト之カ反對論者間ニ  
好箇ノ題材トシテ久シク新聞紙ヲ賑ハシ熾ナル論戰ヲ見  
タキ而シテ反對論者ヨリ竝ヘテ政府ノ極東時局ニ斯ク  
惑溺スルノ危険ヲ説キ外交當局ヲ攻撃シテ餘温ナ  
カチキ是等ノ悲觀論者ハ切リニ支那政府カ比隣列強  
ニ自國分割ノ機會ヲ與ルルカ如キ此重大問題ニ對シ  
如何テ我政府ノ要望スルカ如キ蒙古問題ノ解決ニ同  
意スヘキヤト絶叫セシモ賢明ナル支那政府ハ我提案ニ

露支關係ノ避クヘカラサル危  
機ハモハ終ニ一ノ幻影ニ終レリ

露支ノ關係タルヤ爾来兩國カ經濟並政策上而立ス  
ヘカラサルヲ云マスルカ如キ不良且緊張ヲ来セシコト當  
テアリシコトナレ而シテ西帝國ハ當然和親相抱擁スルノ  
行夫ヲ有ス勿論兩國ノ尙稍危險性ヲ帶フル誤解若  
クハ異和ヲ生セシコトアルモ兩國ニシテ誠意ヲ吐露スルニ  
於テハ平和ナル解決ヲ告ケ決シテ衝突ヲ惹起スル無キ  
ハ明白ナリキ今回締結セシ協約ハ實ニ敘上ノ事實ヲ  
證明シ且西者ノ關係ノ破裂ヲ疑懼セシ論者ノ胸算カ  
正當ナラナリシヲ指摘スルモノニシテ實ニ今回ノ調印ハ正ニ  
十年ノ久シキニ互リ北京政廳ノ惡辣陰險ヲ極メシ反

對政策ト爭鬭ヲ續ケシ尙外蒙古ニ露國ノ政策並  
經濟的勢力ヲ扶植スヘキ舊来ノ係爭事件並大團體  
ヲ告ケレタルモノト云フヘシ

若シ夫レ此協約ニ於テ露國カ支那ノ宗主權ヲ認メシニ  
想到セハ第一著ニ我外交力單ニ蒙古問題ヲ速決シ  
支那政府ヲシテ蒙古ノ自治ヲ承認セシムルノ希望ヲ有  
スルノ外他意ナク彼ノ支那新聞カ著々論難セシカ如キ  
支那共和國ノ政策並國威ヲ凌辱スル目的ヲ有セザリ  
シヲ知り得ヘシ露國ハ寸毫モ極東ニ領土ヲ獲取スル  
ノ野心ナク專ラ亞細亞邊境ニ於ケル我ノ經濟並政策  
上ノ利益ニ適應スル平和的文化ノ發達ヲ庶幾スルノ  
ニ今蒙古問題ノ解決ニ關シ中華民國力進テ露國

外交ノ希望ト要求ヲ聽ケルニ徴セハ彼レノ其多數ノ排  
露主義者カ今日迄ヲ解スル能ハサリシ我誠意ヲ確認  
自得セルヲ豫想シ得ヘシ

北京政府ト活佛政廳間ニ仲介ノ勞ヲ取リシ露國政  
府ノ援助ヲ以テ自治權ヲ得取セシ蒙古ハ將來更ニ我ニ  
倚賴シテ自己ノ經濟狀態ノ改善ニ努力スルヲ得ヘシ而  
シテ露國ノ只管要求スルハ蒙古ノ土地ニ非スレテ我國  
境ト延々幾百里ニ接壤スル隣邦ノ保安ト靜謐ノ  
今ヤ支那政府ハ武力ヲ以テ蒙古ヲ附庸國ニ自己ノ  
宗主權ヲ確保スルノ必要ナキニ至リシヲ以テ錯綜糾紛  
セル國內ノ整理ニ全力ヲ傾注スルヲ得ヘク以テ光輝燦  
然タル中華民國ノ將來ヲ大ニ期待シ得ヘシ即チ政策

茲經濟上ニ関シ既往ノ支那帝國ヲ再現セントスル民國  
大總統ノ施設ハ以テ嚆望スヘク又民國第一回ノ實現  
尙袁世凱ノ事業ヲ防害セシ彼カ敵手ノ反抗ニ依テ  
將來苦境ニ陥ルコト無カルヘシ

二、内外蒙古並滿洲ニ於ケル露國ノ勢力

外蒙古ニ於ケル勢力

商業保護  
政策ノ失敗

外蒙古ニ於テハ露國ノ商業保護政策ハ全ク失敗ニ歸  
シ庫倫ハ爲ニ日用品價格ノ暴騰トナリ怨聲漸ク高  
ク露國モ遂ニ支那ニ交渉シテ張家口ヨリ支那貨物ノ  
輸入ヲ乞フニ至リ三千餘頭ノ駝獸ハ十一月陸續庫倫  
ニ入ルニ至リ支那人ノ高況頓ニ活氣ヲ呈スルニ至リ  
先年軍事教官トシテ庫倫ニ赴ケル「ナテ」ジヌイ大佐

軍事教官  
ノ失敗

ハ豫定ノ期日ニ所期ノ訓練兵ヲ得ス(六百ノ對シ)シテ  
蒙古當事者ト衝突シ歸還スルコトナレリト  
以上ノ如ク一ニノ失敗アリタリト雖露國ノ外蒙ニ於ケル執力  
カハ到底抜クヘカラスモノアリ左ニ之ヲ列記スヘシ

○軍事

庫倫ニ軍事廳ヲ新設シ露國將校ヲ會議長ト為  
ス

十月上旬「アリラン」デナル露人外蒙四汗ノ顧問トナル

○財政

財政ノ窮乏ニ對シ蒙古特別派遣大使ハ露國政  
府ニ哀願シ更ニ三百萬(或ハ四百方トモ云フ)ノ借款  
ヲ為セリト其詳細ハ未ダ知ルヲ得サルモ兎ニ角蒙古

財政ノ實權ハ既ニ露ノ掌中ニアリト謂ヒ得ヘシ

○内政

「ゴロストウキツ」ハ蒙古各大臣ヲ無能トシ監督者ヲ  
各省ニ入ルルコトトシ議會議長ハ露人ヲ任スルコト  
セリ

○教育

庫倫附近ノ各部落十數箇所ニ學校ヲ建設シ「イル  
ク」ツク「アチ」ンスクニハ貿易研究ノ為メ商業學  
校ヲ建設セリト

○殖民

蒙ニ烏梁海方面及多謝圖汗ニ三万人ニ餘ル移  
住民アルコトヲ述ヘシカ現時庫倫ニ在ル露人ハ軍隊

ヲ合シ一万人ニ達セリト(朝鮮人ノ數)是レ其一斑ニ過  
キス以テ如何ニ露國ノ勢力カ外蒙全般ニ漲ルニ  
ヲ知ルニ足ラン

### 内蒙ニ於ケル勢力

内蒙ニ對シテハ露國ハ大ニ日本ヲ挑發スルコトナ  
キカテ恐レテ總テ消極的ニ行動スツツアリ為ニ内蒙  
人等ハ存外露國ノ勢力ヲ認メズ却テ日本人ニ對シ  
テ好意ヲ表スルノ傾アリ先ツ各種宗教上ノ施設ニ  
盡カシ之ヲ洋化セントスルノ慣手段ハ對處行ハレツ  
ルモ赤峰附近ニハ未タ露人ノ影ヲ見ズ却テ英佛  
人アリト

斯ノ如ク内蒙ニ於テハ其勢力未タ展ヒスト雖露人ハ

既ニ外蒙古軍ニアリテ盛ニ内蒙王公ヲ煽動シ擾  
亂ヲ起サシメント企圖セシ事實アリ又一般ノ狀勢ヨ  
リ考フルモ露國カ外蒙ノミヲ以テ終始満足スルコト  
モ察セラレサルヲ以テ露國ノ漸進主義カ此向ニ潛  
伏シアルモノト見サルヘカラス要ハ時日ノ尚懸ルニ

### 滿洲ニ於ケル勢力

露國ノ滿洲經營ニ就テハ多クヲ語ルヲ要セス然レト  
モ近時「ゴングツチ」カ愈々其抱負實施ノ緒ヲ示シタ  
ルカ如ク自領沿海州ニ於テ居住權及旅行權ニ制限  
ヲ與ヘ逐次黃色人ヲ驅逐セントスルノ形跡アリ  
加之外蒙ノ解決ト共ニ呼倫貝爾ヲ故ラニ外蒙古外  
ニ置キ之ヲ併合セルトスルニアラスヤトノ兆アリ近時盛



ニ勝福ヲ利用シテ支那殖民ヲ同地方ヨリ堅逐シ  
ツツアリ是レ明露國ノ取テ以テ代ラントスル第一歩  
ナリ先年滿州里附近國境問題ニ於テ彼レノ態  
度茲蒙古ニ關スル露支談判中ノ態度ニ徴スルモ彼  
レノ本意ノ在ル所ヲ察セラル  
是レ由テ之ヲ觀ルモ當テ「クロハトキン」將軍カ所富  
汗波斯ニ對シテ取ル漸進不休計畫カ實際ニ極  
東ニ現出シツツアルノ感アリ尺ヲ得寸ヲ延セシ白  
熊ノ從今ヤ西部黒龍江省並内蒙ニ及ハントスルナリ

電信課長



大臣

次官

政務 事務

通商

人事

會計

文書

大 陸 閣

牧野 外務大臣

水野 大使

露都 大正三年一月十五日 午後七時五分

76  
23

奉天 陸軍部 陸軍大臣 陸軍省 陸軍部 陸軍省 陸軍部 陸軍省

「ゴザコフ」に面會、序に、呼倫貝爾に對する露國政府の態度如何ヲ尋ね、露國政府の同地方に全然支那の主權、下に置き、地方行政は從來王公ツシテアサシムルニトシテ外蒙古の全然之ヲ區別シタキ意思ありと答へ、又同氏は、東清鐵道副總裁哈爾濱出張、黑龍江都督ヨリ

同省金鑛ヲ抵當トシテ借款、申込アリ又吉林省ヨリ「森林」抵當トシテ借款、申込アリソル所、右抵當ハ何レモ確實ナルモノニ付右申込ニ應シ、可然ト思考スルモ大臣大臣、意思固ハ未シ之ヲ承認セズ、本林省森林、日露兩國、勢力範圍ニ具ルヲ以テ本件、如何ニ決定スルトモ、日本、打合ス、レト、然ラタリ、尚一月十五日、東清鐵道副總裁、訪ル所、依ヒ黑龍江都督申込借款額、五百萬兩、由ナリ

2-0060

0402



Handwritten characters, possibly a signature or recipient's name, written vertically.

抄

文書課長

秋

大正三年一月十六日

送附

辨

政務局出

森



片寄

野方使及  
山登使  
三芳使

依佛... 指... 申出... 件

大正三年一月十六日

外務省

上... 依佛... 申出... 件

福一... (封... 施... 内... 不... 明...)

今... 依佛... 申出... 件

2-0060

0403

某ナルモノガ<sup>兵庫寺局</sup>下各法ニシテ  
 結果ニおハラスヤン<sup>兵庫寺局</sup>ヨキヨク<sup>兵庫寺局</sup>  
~~本年~~ 増分ヨリ若<sup>兵庫寺局</sup>知<sup>兵庫寺局</sup>先<sup>兵庫寺局</sup>也  
 中<sup>兵庫寺局</sup>其<sup>兵庫寺局</sup>由<sup>兵庫寺局</sup>者<sup>兵庫寺局</sup>百<sup>兵庫寺局</sup>後<sup>兵庫寺局</sup>カ<sup>兵庫寺局</sup>ト  
~~兵庫寺局~~  
 仍<sup>兵庫寺局</sup>カ<sup>兵庫寺局</sup>神<sup>兵庫寺局</sup>行<sup>兵庫寺局</sup>ヨリ<sup>兵庫寺局</sup>也<sup>兵庫寺局</sup>五<sup>兵庫寺局</sup>某<sup>兵庫寺局</sup>ナリ  
 之<sup>兵庫寺局</sup>カ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>今<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>シ<sup>兵庫寺局</sup>ヨリ<sup>兵庫寺局</sup>直<sup>兵庫寺局</sup>毛<sup>兵庫寺局</sup>也  
 政府、<sup>兵庫寺局</sup>扶<sup>兵庫寺局</sup>同<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>出<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>タ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>ア<sup>兵庫寺局</sup>ラ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 外務省  
 勿<sup>兵庫寺局</sup>論<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>至<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 ナ<sup>兵庫寺局</sup>ク<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>カ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>到<sup>兵庫寺局</sup>セ<sup>兵庫寺局</sup>サ<sup>兵庫寺局</sup>リ<sup>兵庫寺局</sup>シ<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>知<sup>兵庫寺局</sup>ハ<sup>兵庫寺局</sup>  
 有<sup>兵庫寺局</sup>キ<sup>兵庫寺局</sup>今<sup>兵庫寺局</sup>方<sup>兵庫寺局</sup>便<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>況<sup>兵庫寺局</sup>ハ<sup>兵庫寺局</sup>シ<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>至<sup>兵庫寺局</sup>キ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 希<sup>兵庫寺局</sup>ニ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>因<sup>兵庫寺局</sup>係<sup>兵庫寺局</sup>ヨ<sup>兵庫寺局</sup>リ<sup>兵庫寺局</sup>  
 ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>其<sup>兵庫寺局</sup>其<sup>兵庫寺局</sup>記<sup>兵庫寺局</sup>  
 者<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>佛<sup>兵庫寺局</sup>ヨ<sup>兵庫寺局</sup>リ<sup>兵庫寺局</sup>而<sup>兵庫寺局</sup>之<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>至<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 者<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>佛<sup>兵庫寺局</sup>ヨ<sup>兵庫寺局</sup>リ<sup>兵庫寺局</sup>而<sup>兵庫寺局</sup>之<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>至<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>  
 者<sup>兵庫寺局</sup>ノ<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>佛<sup>兵庫寺局</sup>ヨ<sup>兵庫寺局</sup>リ<sup>兵庫寺局</sup>而<sup>兵庫寺局</sup>之<sup>兵庫寺局</sup>以<sup>兵庫寺局</sup>テ<sup>兵庫寺局</sup>至<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>モノ<sup>兵庫寺局</sup>ガ<sup>兵庫寺局</sup>ト<sup>兵庫寺局</sup>ナ<sup>兵庫寺局</sup>ル<sup>兵庫寺局</sup>

2-0060

0404

此の書翰は天皇陛下に持至  
 り給へる限に申上り候旨先付  
 諸書翰より先使迄布立せ給  
 候事此使の裁仰り申上り候  
 事外務省に限りて拒絶せら  
 れ申上り候事申上り候事  
 大月より是迄申上り候事  
 此の旨を使へ給へば何れ申上  
 外務省

政府に法紙の上より何れ候  
 申上り候事此の旨を先使  
 持至候事

大正三年一月十五日  
 高島宮外務大臣  
 高島宮外務大臣  
 高島宮外務大臣  
 高島宮外務大臣

高島宮外務大臣  
 高島宮外務大臣  
 高島宮外務大臣



Strictly confidential.

Gists of some political statements made by Mr. Kodama to the Mongolian Ministers at Urga.

It seems desirable that the Mongolian Princes should be duly advised on the necessity of uniting all Mongols as well in Inner as in Outer Mongolia, - this being the vital condition for the political regeneration. If letters would be sent to some of the Princes namely to the hoshuns of Bairan, Charud, Aro-Karachin and Oug-nut, Mr. Kodama is prepared to forward such letters to the addresses.

Owing to the good relations existing now between Russia and Japan, the latter is not inclined to contrary the Russian wishes. Therefore the Da-lama, on his arrival to Harbine, could not proceed further and was not received by the Japanese authorities. Nevertheless Japan, although she was tied by the rules of international intercourse, will never forget the good intentions towards her of the Da-lama and the latter's mission - unfulfilled as it remained - still produced a good moral effect and surely shall bring good results in future.

To ask anybody's friendship or protection without offering some compensation is not a sound policy.

Japan has not the intention to make territorial acquisitions

- 2 -

in Inner Mongolia; her object there is the construction of a railway for the development of her commercial interests. Practically the land in that region is owned either by Mongols or by Chinese which fact is well known to Japan and the construction of the said railway can in no case mean any territorial encroachments from the part of the Japanese. Friendly proposals of the mongolian Government on this subject would be readily taken in consideration by Japan.

Japan shall surely obtain the right to construct the above mentioned railway from the Chinese Government but in such case Japan will be obliged to back to China to the detriment of Mongolia, as the Chinese should then be able to increase the number of their troops in Inner Mongolia. This point is so much the more important as the attack of Outer Mongolia is planned by the Chinese in the north west direction from Taonanfu.

On the contrary Japan having its special interests in Inner Mongolia and opposing the despatch of Chinese troops to that region, it shall not be easy for China to insist and to enforce in practice such a measure.

2-0060

0407

Strictly confidential.

My Government instructs me to hand over to Your Excellency a letter of the Hutuhta to His Majesty the Emperor of Japan, containing a request to send a representative to Urga and to help the Mongolians in their aspirations for a political union of all Mongols.

When the Mongolians proclaimed their independence from China the Japanese Government expressed the desire to fix the limits of the sphere of Japanese influence in Inner Mongolia, - this was done by the agreement signed between Russia and Japan in 1912. In compliance with this agreement the Russian Government did never give any hope to the Mongolians of a possibility to see the tribes of Inner Mongolia submitted to the authority of the Hutuhta. The same consideration guided the Russian Government at the time of signature with China of the last declaration in which the autonomy of Mongolia is limited to Khalha and Kobdo district. These territorial restrictions aroused, however, the dissatisfaction of the Mongols and actually the Russian Government has the hard task to insist before the authorities at Urga that the said territorial limits should be accepted by the Mongols as the basis for the expected russo-chinese-mongolian treaty. In the opinion of the Russian Government this task is imposed on him by the above mentioned agreement with Japan.

- 2 -

From this point of view the attempt of the Urga authorities to enter into direct relations with Japan can not be considered as a opportune. It increases the difficulties in the endeavour of the Russian Government to curtail the ambitions of the Mongols in accordance with the existing political circumstances, - the latter aim being dictated not only by the russian interests but also by the desire of the Russian Government to take into consideration the interests of Japan.

Meanwhile a Japanese employee of the South Manchurian Railway Kodama went to Urga in 1913 and entered into negotiations with the mongolian officials (the gist of these negotiations is given in the annexed strictly confidential document). The pourpalers with Kodama evidently gave to the Urga authorities the idea to address themselves to the Japanese Government for assistance in the fulfillment of their dream - the annexation of Inner Mongolia to the Outer Mongolia.

The Russian Government, if exactly informed about the views of the Japanese Government, is inclined to consider such a plan as inconsistent with the actual policy of the Tokio Cabinet and expresses the hope that, in case if an answer will be given by His Majesty the Emperor of Japan to the letter of Hutuhta, Russia would be acquainted with this answer.

1/14 January, 1914.

2-0060

0408



The Gaimusho,  
Tokio, January 15th, 1914.

Dear Ambassador,

I am directed by Baron Makino to return herewith  
the two confidential papers which Your Excellency left with  
him yesterday.

Yours sincerely,

Signed: K. Matsui.



Handwritten Japanese text and a signature, partially obscured by a large black redaction mark at the top.

2-0060

0409

柳一守海防

電信課長



3

電送第一七七號  
三年一月三日

政務局長

第一課



牧野大臣

奉天

落合總領事

英三三三

左露大使 英三三三三三三

一 同号全文

外務

省

右北京 哈名宿へ轉電アリタシ



手紙

電報



13

18  
22

漢

北京

王露  
古野大使

牧野大使

九月八日

送第 二六九 號  
大正 三年 一月 四日

一月十日在古野露王大使来  
訪古野政府ノ訓令ニ依リ趣  
露野滞在中ノ蒙大使節  
ヲ提出ニ付天皇陛下宛テ佛

外務省

帝親王ノ御出立ニ在リ  
帝親王ノ御出立ニ在リ

帝親王ノ御出立ニ在リ  
帝親王ノ御出立ニ在リ

帝親王ノ御出立ニ在リ  
帝親王ノ御出立ニ在リ

帝親王ノ御出立ニ在リ  
帝親王ノ御出立ニ在リ

帝親王ノ御出立ニ在リ  
帝親王ノ御出立ニ在リ

2-0060

8411

構呈に得(キ)限、非(キ)言(フ)失(ス)其  
 代(リ)返(ル)却(ル)因(リ)大使(ト)出(シ)政  
 府(ニ)請(ク)利(ヲ)上(ル)更(ニ)何(カ)ノ事(ト)申(出)ス  
 以(テ)キ方(ヲ)述(ス)一(ト)引(取)リタリ然(ル)ニ一  
 月(ト)ホ(リ)露(露)都(都)尙(尙)書(書)日(日)々(々)特(特)派  
 員(員)電(電)報(報)ニ(ニ)帝(帝)皇(皇)政(政)計(計)法(法)佛(佛)ノ(ノ)玉  
 書(書)ヲ(ヲ)拒(拒)絶(絶)返(返)附(附)シ(シ)ル(ル)趣(趣)見(見)エ(エ)ル(ル)付(付)  
 一月(月)廿(廿)三(三)日(日)五(五)日(日)使(使)館(館)員(員)上(上)申(申)付(付)カ  
 自然(然)者(者)地(地)球(球)論(論)新(新)聞(聞)等(等)ノ  
 外務省  
 問題トモナリ場合ニ(ニ)在(在)書(書)翰(翰)見(見)  
 玉皇(玉皇)劃(劃)策(策)ノ(ノ)結果(結果)ニ(ニ)シ(シ)テ(テ)見(見)玉(玉)ノ  
 事(事)務(務)ノ(ノ)帝(帝)皇(皇)政(政)計(計)ノ(ノ)全(全)然(然)開(開)知(知)  
 也(也)所(所)以(以)シ(シ)テ(テ)帝(帝)皇(皇)政(政)計(計)ノ(ノ)自(自)己(己)ノ  
 意(意)ニ(ニ)開(開)知(知)セ(セ)ル(ル)事(事)務(務)ノ(ノ)出(出)テ(テ)シ(シ)ル(ル)  
 此(此)種(種)書(書)翰(翰)ヲ(ヲ)天(天)皇(皇)陛(陛)下(下)ニ(ニ)構(構)呈(呈)  
 ン得(得)テ(テ)キ(キ)限(限)ニ(ニ)非(非)ル(ル)ヲ(ヲ)以(以)テ(テ)之(之)ヲ(ヲ)拒(拒)絶(絶)シ(シ)ル(ル)  
 之(之)ノ(ノ)事(事)務(務)ノ(ノ)明(明)示(示)ス(ス)ト(ト)モ(モ)



彼行保特道 中二日 幕閣  
 特使各に告げて曰く 爲國外務省機密 附行  
 ●活佛の國書返展 蒙古  
 の手を經て日本皇帝に送り  
 し活佛の國書は日本政  
 府之を受附けず近々風り來り  
 るなり是日本が蒙古を侮  
 辱せしもの 聖主政府の面影にして實に  
 に無以時に入らず能れり然れど 奈  
 等此事實を信ぜず

K. B. M. W. A.  
 百二十  
 子  
 子  
 子

2-0060

0414

物交(2)

物

露都收 大正三年一月十四日午後四、三〇  
本有署名 二十五日午前二、四〇

牧野外務大臣 本野大使

才六九号

77  
スミ

一月二十四日「イウエウ」 牧野大臣外交演説

ニ対スル評論要領

日本「滿洲」ニ於ケル其利益存在ニ為シテ  
敵トスルヲ不利トシテ友邦ニ對シテ未嘗測シ難  
キニシテ人目未嘗存非レテ以テ日本政府ニ  
協同ノ親交關係ヲ得ルニ由ルニ日本「滿洲」  
協同ニ對シテ協同ニ對シテ協同ニ對シテ

タリト コトナシハ協同ニ對シテ 時論見前 Kohkurobin 是日

ノ勢力範圍ニ属スルハ内閣古閣際ニ猶ほ  
日本ノ支持ヲ求ムルニ要ス日本外交家ハ日露  
協同ヲ利用シタルヲ以テ協同ニ對シテ利用スル  
ニ要ス日露接近ノ主張スル吾人「岸」名  
ニ日露親交ニ満足スルモニアラス

三 一 九

2-0060

0415

手紙  
2

協

大正參年壹月廿七日接受

大正 三年 一月 廿九 日附

別紙

送第 號

機密

機密送第六號

大正參年壹月廿九日

在野大使

牧野大使

見取報告  
書呈  
海軍省  
催行

山坐使

要再印

外務省

去一月十四日在野大使車訪  
 於大正、面會、上、古、使、長、官、海、軍、省、  
 在野、提出、シ、タル、モノ、ナリ、ト、テ、活、佛、ヲ、天、皇、  
 陛下ニ、宛、テ、タル、書、翰、一、通、(封、シ、施、シ、テ、  
 テ、由、宛、不、明、)ヲ、呈、出、シ、而、以、政、府、ノ、訓、令、  
 依、ル、極、シ、テ、カ、持、名、方、ヲ、出、テ、同、時、  
 ニ、海、軍、省、乙、方、書、翰、ヲ、示、シ、令、同、活、佛、ヲ、  
 天皇陛下ニ、書、翰、ヲ、呈、送、ス、ル、事、ナ、ル、

2-0060

0416



内務省に宛て玉某が序倫吉向ト令陸  
 ニタレ結果ニ外ナラサレトトカ連、仍テ大  
 正ヲ見玉某が序倫吉向ト令陸  
 又ハ電ニ政社<sup>幕閣</sup>ノ指揮ニ出テ又  
 毛ノニハサレハ勿論政社ハ見玉某が序倫  
 正トキ又ハ<sup>幕閣</sup>ノ指揮ニ出テ又  
 尚テ曰大使ニ送付シ玉某が序倫吉向ト  
 是ノ<sup>幕閣</sup>ノ指揮ニ出テ又  
 外務省  
 關係ヲ有テ以テモトサレテハ支那  
 又ハ活佛ヲ有テ見玉某が序倫吉向ト  
 若シモ活佛ニ基キ送付シ玉某が序倫吉向ト  
 皇陛下ニ指送シ玉某が序倫吉向ト  
 大臣書翰ヲ有テ見玉某が序倫吉向ト  
 大使ヲ有テ見玉某が序倫吉向ト  
 限リニ拒絶セシメ支ナキヤト令陸  
 以テ<sup>幕閣</sup>ノ指揮ニ出テ又

2-0060

0417

本日大使の始るハ何カ不致村。詰訓  
ノ上更、何カノ儀中出ク、ト述ハ、  
船ヲ持テ、  
大使、  
船ヲ提出シ、  
等、  
事、  
外務省

ト考へ、  
又、  
知、  
右、  
甲、

2-0060

0418

Strictly confidential.

Glats of some political statements made by Mr. Kodama to the Mongolian Ministers at Urga.

It seems desirable that the Mongolian Princes should be duly advised on the necessity of uniting all Mongols as well in Inner as in Outer Mongolia, - this being the vital condition for the political regeneration. If letters would be sent to some of the Princes namely to the hoshuna of 巴林 札魯特 阿爾科爾沁 翁牛特 烏魯特, Mr. Kodama is prepared to forward such letters to the addressees.

Owing to the good relations existing now between Russia and Japan, the latter is not inclined to contrary the Russian wishes. Therefore the Da-lama, on his arrival to Harbine, could not proceed further and was not received by the Japanese authorities. Nevertheless Japan, although she was tied by the rules of international intercourse, will never forget the good intentions towards her of the Da-lama and the latter's mission - unfulfilled as it remained - still produced a good moral effect and surely shall bring good results in future.

To ask anybody's friendship or protection without offering some compensation is not a sound policy.

Japan has not the intention to make territorial acquisitions

- 2 -

in Inner Mongolia; her object there is the construction of a railway for the development of her commercial interests. Practically the land in that region is owned either by Mongols or by Chinese which fact is well known to Japan and the construction of the said railway can in no case mean any territorial encroachments from the part of the Japanese. Friendly proposals of the mongolian Government on this subject would be readily taken in consideration by Japan.

Japan shall surely obtain the right to construct the above mentioned railway from the Chinese Government but in such case Japan will be obliged to back to China to the detriment of Mongolia, as the Chinese should then be able to increase the number of their troops in Inner Mongolia. This point is so much the more important as the attack of Outer Mongolia is planned by the Chinese in the north west direction from Taonanfu.

On the contrary Japan having its special interests in Inner Mongolia and opposing the despatch of Chinese troops to that region, it shall not be easy for China to insist and to enforce in practice such a measure.

2-0060

0419

Strictly confidential.

My Government instructs me to hand over to Your Excellency a letter of the Hutuhta to His Majesty the Emperor of Japan, containing a request to send a representative to Urga and to help the Mongolians in their aspirations for a political union of all Mongols.

When the Mongolians proclaimed their independence from China the Japanese Government expressed the desire to fix the limits of the sphere of Japanese influence in Inner Mongolia, - this was done by the agreement signed between Russia and Japan in 1912. In compliance with this agreement the Russian Government did never give any hope to the Mongolians of a possibility to see the tribes of Inner Mongolia submitted to the authority of the Hutuhta. The same consideration guided the Russian Government at the time of signature with China of the last declaration in which the autonomy of Mongolia is limited to Khalha and Kobdo district. These territorial restrictions aroused, however, the dissatisfaction of the Mongols and actually the Russian Government has the hard task to insist before the authorities at Urga that the said territorial limits should be accepted by the Mongols as the basis for the expected russo-chinese-mongolian treaty. In the opinion of the Russian Government this task is imposed on him by the above mentioned agreement with Japan.

- 2 -

From this point of view the attempt of the Urga authorities to enter into direct relations with Japan can not be considered as a opportune. It increases the difficulties in the endeavour of the Russian Government to curtail the ambitions of the Mongols in accordance with the existing political circumstances, - the latter aim being dictated not only by the russian interests but also by the desire of the Russian Government to take into consideration the interests of Japan.

Meanwhile a Japanese employee of the South Manchurian Railway Kodama went to Urga in 1913 and entered into negotiations with the mongolian officials (the gist of these negotiations is given in the annexed strictly confidential document). The pourpalars with Kodama evidently gave to the Urga authorities the idea to address themselves to the Japanese Government for assistance in the fulfillment of their dream - the annexation of Inner Mongolia to the Outer Mongolia.

The Russian Government, if exactly informed about the views of the Japanese Government, is inclined to consider such a plan as inconsistent with the actual policy of the Tokio Cabinet and expresses the hope that, in case if an answer will be given by His Majesty the Emperor of Japan to the letter of Hutuhta, Russia would be acquainted with this answer.

1/14 January, 1914.

2-0060

0420

文書課長

大正參年壹月廿九日 接受

13

大正 参年 一月 廿九日 附

別紙

送第 號

蓋印

大正參年壹月卅壹日 達

牧野大臣

在英大使

在德大使

在米大使

在佛大使

在伊大使

在澳大使

在文那公使

在華夫總領事

在哈爾濱總領事

蒙古使節、在滿洲國大使、死

外務省

2-0060

0421

タル書翰譯文を送付件

憲部滞在中、庫倫政村總理大臣

三音諾顏汗、癸亥年十月二十二日其

隨員、在熱河國大使館に遣はる

館員、面會の上、大使に對して同大臣

ノ敬意ヲ傳達スル、若シ同大使死ハハ

臣ノ書翰並、其佛譯文ヲ交付セシ

タル類、今回在憲部ニ送付スル、大使

外務省

有書送の裁を付す

追：古譯文、及、送付間、而

由、査察、申進、也

追于同總理大臣、在憲部、以、國、為

大、公、使、館、に、對、し、て、書、翰、送、付、す、

通、告、を、為、す、由、を、念、申、上、す、也、

（大正三年十月二十二日、在憲部、大使、館、に、附、

二二三号、附、書、翰、佛、譯、文、ヲ、送、付、す、事、）



手紙  
2

本引

大正三年一月一日

12月

去

漢族協托

見玉利正氏蒙古祝祭記執筆

大正三年九月四日 庫倫着 全月三十一日 庫倫発

極秘

秘

共字ニ相秘ト印日主ク

2-0060

0423

蒙古政府ノ大官其他名アル人トノ會見記

一、海山公トノ會見

一、九月六日在ハルビンノ露人ラテイギン氏ノ紹介状ヲ推乃ヘ  
 行テ海山公ヲ訪フ公ハ内務部次官ナリト云フガ二十日  
 計リ前落馬シテ大脚ヲ打撲シ床ニ在テ面會セリ  
 二、此人ハ喀喇沁ノ者ニシテ曾テ露國ガ内蒙ニ於テ企畫  
 スル所アリシ際其子息ト共ニヒトコホー(陸軍大佐今怡  
 克圖ノ國境事務官)ノ宅ニ二三年アリト云フ  
 三、此人ハ漢文ヲ解シ且才幹アリ此人ヲ嫌フミルル氏サハ  
 蒙古人の中ニテハ先ツ才幹アル者ナリト云ヘリ  
 四、彼ト會見セシ時彼ハ爾親王及恭親王(北兩親王

海軍

ニ付テ尋導スル者多カリキ)ノ現状ニ就テ問フ所アリタリ  
 又大喇嘛ガ日本ニ行カントセシ時賓圖王ト共ニ自  
 分ニ行カントセシガ事情ノ詳ササルモノ有テ其子息  
 ヲ隨行セシメタリト云ヘリ  
 五、ミルル氏ハ海山公ハ喀喇沁王ニ屢書面ヲ送テ事  
 實アリ袁ノ政府ト關係アリ君ニ彼ニ注意セヨト余  
 ニ話シタル事アリ又氏ト晚餐中賓圖王ノ死ニ就テ  
 聞キ且海山公ハ今ヤ落馬シテ即床ニ居シリト云ヒシニ  
 氏ハ海山モトノルカ知シ又 God knows him. ト云ヒシ  
 事アリタリ(氏ガ公ヲ嫌忌スル原因ハ曾テ公ガ大喇嘛  
 シテ日本行ク企テシメシニ依ルニ非ラヤト思ハル)  
 六、上月留西北魯特ヨリ豆兒科見ル王符ニ歸リタル  
 時余ト同居セル喇嘛(アイケン廟ノ住職)告テ曰昨日

花崎納



得タル報知ニ據リハ驚クヘシ海山公ハ蒙古政府ノ  
 捕縛スル所トナレリト余ハ其ハ氣ノ毒ナリミルル氏ガ  
 余ハニ邪推深キ所ヲ起クタル者ナラント云ヘリ  
 七、或日海山ト面會ノ旨即喀喇沁ハ鑛山アリト云ク日  
 本人ト共同ニテ開鑛シテ如何ハ蒙古側ハ鑛區ヲ  
 出シ日本側ハ資本及技術者ヲ出ストセハ如何ト云  
 ヒ云々彼ハ大ニ悦ビ喀喇沁王モ甚々希望セラルル所  
 ナリ書面ヲ送ルカラ喀喇沁王ハ面會ニテ話ト云  
 レヨトテ同王ニアケ一封ノ書面ヲ授セリ  
 余ハ又彼ニ告ラ曰ク開鑛ストセハ喀喇沁旗下ノ  
 ニテハ不充分ナリ其他ノ旗ニ聯合ニテ開鑛ノ約  
 束シ為サレ可ラス之カ為ルニ或ハ喀喇沁王ノ  
 周旋シ要スルヤモ知レヌト彼曰諾

海軍

余ハ自ラ開鑛ノ事ニ關係セシガ為テ話タルニ非  
 若シ調査ノ上有望ナリトセハ同胞中希望者ア  
 ルヘシト思ヒ自ラ其代表者ト為テ話ニ掛ケタル  
 ニ過キス蓋シ余ハ兼テ内務部ニ於ケル鐵道ト  
 開鑛トハ我國人ニ據テ為サレ可ラスト思ヒ居  
 タレバナリ開鑛ノ如キハドローモイト為ス者ア  
 然レトモ若シ調査ノ上果シテ内務部ノ金鑛ガ  
 有望ナラハ金鑛本位ニシテ金ナキ我國が決  
 等開ニ付ルヘキモノニ非レハナリ

又内務大臣大喇嘛トノ會見  
 一、大喇嘛ハ南洋日本ノ好意ヲ得ントシテ日本  
 金ヲ行ク能ハス海拉兒ヲ空ク帰リタル人ナリ

花崎納

蒙古人間ハ勿論重要アリミルル氏ハ蒙古大官  
中智識アリ者ト評セリ海山公ハ大喇嘛ノ外ハ物  
ノ判リタル者一人モナシト云ヘリ

二氏ハ日本ト通商ヲ希望スル者ヲ語レリ

三氏トハ會見ハ余ハ固マ無意味ニ會見セリ然レモ  
氏ハ何等カ余ニ期待スルモノアリシカ如ク後日ニエテ  
感スルヲ得タリ此事ハ片テ「晩報」中ニルル氏トノ  
談話ノ項ニ述クヘレ

三 札薩克圖王タリシ烏泰トノ會見

一 九月六日烏泰王ハ人シテ簡單ニ書面ヲ持タテ  
ヒシメ且本日午後四時頃ニ來駕ヲ得ハ幸甚ナリ  
トノ意ヲ陳フ持タテセル書面ハ蒙古文ニシテ解セ

海軍

サレトモ人ヲ就テ聞ケル慰問状ラレ

二 在庫倫ノ或ル支那人ハ蒙古ノ大官中烏泰王ガ  
利巧ナラシト云ヘリ王ハ三道ヲ歩ム人蒙古ノ道ヲ  
歩ケハ支那ノ道モ歩ルキ亦露西亞ノ道モ歩ルム  
人ナリト評セリ

三 彼ハ南蒙兩親王ノ現状ヲ尋テ余カ曾テ中央平原  
ニ旅行セル時ノ模様ヲ聴キ且哲里木盟ニ長タレ  
齊公ノ彭及ハ未ダ辯駁ナラヤトキ、(辯駁ノ有無ヲ  
以テ共和ニ賛不賛ヲ判知スルモノ、如シ(齊公ハ余ト  
會見セル時ハ辯駁ナラヤ)ナリ

四 彼ハ民國ガ五族共和ノ辭ヲ以テ蒙古地面ヲ併吞  
セトシ今蒙古ト民間ト開戦中ニアリ今内蒙ハ  
民國ニ隷屬スト虽蒙古人種ハ皆意ヲ此庫

花崎納

倫、傾ケル者ナレバ土地遠隔ニシテ内蒙ヲ保護  
 シ得ズ露國カ内蒙ヲ保護スル如ク若シ日本カ内  
 蒙ヲ保護シクルハアラハ内外蒙古ヲ一統シテ内蒙  
 古國ヲ立ル事ヲ得ん意ヲ陳、日本ハ内蒙ヲ保  
 護シ吾ルルヤ不ハキリ余ハ内蒙古が一國ヲ為ス資  
 格ナキヲ知ント虽左様答ヘナリ余ノ目的タル内外  
 蒙古ノ旅行ハ或ハ遂ケラサルヤモ知シスト氣遣  
 ヒタル余ハ我國民ハ蒙古ノ独立ニ同情シ内蒙ノ  
 保護ヲモ辞セサレトモ我政府ノ意向ハ如何ナルヤ  
 知ルヲ得ズ孰レノ國モ國民ハ重ニ感情ニ馳セ政  
 府ハ一國ノ利害ヲ打算スルモノナレハ往々相及スル  
 コトアリ余ハ固ヨリ責任ヲ以テ答ヘ得ル所ニ非スト  
 云ヒタルハ此語ハ止ミナリ

海軍

五、九月廿日海山公ヲ訪ヒタル帰途ニ於テ烏泰王ヨリ  
 來リ王邸ニ至リ寄リ呉シヨト云フニヨリ立寄リ王ト  
 會見セシメ王ヨリ日本ニ吉林奉天ノ地ヲヤルガトカ  
 ト云フ余ハ日本ハ土地ハ要ス經濟上ノ利益ヲ得  
 ハズトシ内蒙ノ地ハ鐵道布設ノ如キ是ナリト  
 説キシニ彼ハ大ニヨシ日本ノ陋意ニ任スヘシト説キ  
 且ヨリ日本露國支那及蒙古ノ此四國協約ヲ  
 締結シテハ如何ト云フ何ノ協約ナリヤト尋子シ  
 國境ニ関シテナリト云ヘリ余ハ通譯ガ充分ナラザリシ  
 シ以テヨキ様ニ答ヘ置ケリ  
 六、其後又彼ト會セシ時彼ハ再々四國協約ノ話ヲナ  
 セルニヨリ彼ハ告ケテ曰支那ヲラ未タ日本其他ノ承  
 認ヲ得ズ未タ蒙古が一國トシテ國際間ニ取扱

花崎納

ハルノストヲキカス 故ニ今四國協約が成ルモノトヤ否ヲ  
知ラスト

#### 4 三音諾額汗トノ會見

一 汗リ今総理大臣ノ位置、アリホク春秋ノ富ニ當  
年三十七才ニシテ汗ヲ評シテ *Agreeable*  
*man* ト云ヘク成程汗ニ接シテ見レハ何トナク愉  
快ニ感ス汗リ聰明ノ質ニシテ体格モヨク頗ル天  
稟ニ富ムカ如クニコトシテ語り談話ニヨトシナク  
長ク續ケテ話シ掛ケラルルヲ以テ通譯ハ尤右其意  
ヲ通シ兼ル嫌アリ  
汗ハ聰明ナリト雖未ダ充分世界列國ノ形勢ナド  
知り居ル模様ニ非ス

### 海軍

二 最初ノ會見、帝ハミルレル氏統テ未訪ニ書函ヲ  
出シテ汗ト談スル所アリタレハ余ハ直ニ辭シ去レリ其  
後又汗ヲ訪ヒタルニ未定多ク接見スルヲ得ズ汗ハ其  
後余ノ旅店ニ未訪セラレタレドモ余ハ折惠敷不在ニテ  
會見スルヲ得ザリシガ九月二十日ニ續鄂公タリシラシ  
キエル王ノ宅ニ於テ午餐ヲ終リ歸途外務部ノ門前ヲ  
通過セル際外務ノ役人出テ未テ汗面會シタシトテ先  
刺ヨリ方々貴下ヲ捜シ居ル所ナリト云フ依テ外務部ノ馬  
ニ騎リ一鞭加テ汗ノ邸ニ入ル外務次官ヲヨリントルハ氏  
亦在リ氏通訳ス

汗ハ支那ヨリ露國ニ提議シテ支那露國及蒙古ノ  
三國ガ一組約ヲサントス日本之ニ加テ四國組約ナシテ  
ハ如何之ヲ日本政府ニ電報シ其意向ヲキ、吳ノスヤト云ハル

花崎納

余、先刻烏菴王ヨリモ此話アリシガ充分其意ヲ解シ  
難キ点アリ又余、知ル所ニテハ露支兩國間ニ於テ蒙古ニ  
關スル協約ヲナサントスル有ルモ未ダ三國ノ協約アルベシトモ思  
ハズ(余、此事ヲ其後、4ヨリントルハ氏ニ話シタルニ氏、然  
リ然レドモ蒙古ニ露支兩國ガ勝手ニ在リタル協約ニハ從フ  
意ナシト兩國ニ通知セリト云ヘリ)且余、關係スベキ事ニ非ズ  
ト思ヒ電報スルハヨクドモ日本政府ヨリ返電ノ来ルベシトモ  
思ハズト答テ之ヲ断ハレリ然ラバ歸途陸行セズレテ汽車ニテ  
急行シ日本政府ノ意ヲキ、打電ニ告ルヤト云ル是モ余ノ  
為シ得サル所ナリトテ体ヨク断ハレリ汗、然ラバ日本政府ニ書  
面ヲ送リタシ出カシテ引レ吳レヨト云ル(汗、都合ニ依テハ  
其書面ヲ余ニ托ス、意アリシモノ、如シ然レドモ其後王公  
會議ニテソレ<sup>テ</sup>國書ヲ呈スルノ道ニ非ズト定リシガ如シ

海軍

余、甚迷惑ヲ感シ居タレバ都合ヨカリシ其、待フベシト  
答ヘ且日本政府ニ送ラルベキ書面ハ王公皆同意シテ反  
對者無ク且活佛ノ認可サレシ者ニ非レバ不可ナリト  
云ヒレシソレハ國ヨリノ事ニシテ其カ爲數日ヲ要スルナリト  
云ハレタリ

三、庫倫出發ノ前日即九月二十五日告別、爲汗ノ即ヲ訪フ  
汗、明日ノ出發九時ナリトキクガ十一時迄延ハシ吳レヌヤト人  
ヲシテ云ハル余、何カ緊要ノ事アラハ延バヌベシト雖尤モ  
ナクバ豫定通り出發シタシト云ヒレシ然ラバ今國會シタシト  
云ハルニ付會見ス然ルニ此時通譯ノ充分令ル者左サリシ  
汗、露京ニ於テ國書ヲ日本大使ニ渡サントスルモ言語  
通セズ當方ノ意先方ニ解セラズシテ渡スコト出来サルヤモ  
知レズト心配サレ可成、別ニ人ヲ派遣シ國書ヲ呈シタシ

花崎納

日本政府ニ之ヲ受ル様ナレ莫レスヤト云ハル余其甚難  
事ナルベシト答ヘタリ然レドモ汗ニ熱心ニナリテ日本ニ帰ス  
日本政府ニ當地ノ誠意ヲ陳ベ其意向ヲキ、私信ヲ以テ  
電報レ莫レスヤト云ハレタリ

### 外務大臣杭達親王トノ會見

- 一此人ノ露國ニ二回行キタリト云フ
- 二曾テ大喇嘛ガ日本ニ行カントスル時此人ノ反對セリ然レトモ大喇嘛ノ活佛ニ説キ其承認ヲ得タリトハ海山公ノ説ニ據テ知ルコトヲ得タリ
- 三余ノ親王トノ會見ヲ前日約束レ置キタレハ會見ノ當日、外務次官ヲヨリントルハ氏亦親王ノ邸ニ来ル有テ氏通譯ノ勞ヲ取レリ
- 四親王、日本ガ内蒙ヲ保護スルコト猶露國ガ内蒙ヲ保護スル

## 海軍

如キアラハ蒙古ノ内外ノ統スルコトヲ得テ甚都合ヨレ日本ノ保護ヲ希望スル旨ヲ説カレタリ

五親王ニ活佛ニ謁見ヲ請ヒレシ翌日親王自ラ余ノ旅館ニ来リ活佛ノ顔ニ出来物有テ謁見、誰ニモ許サレズト云ハル然ラバ自王右(内蒙ノ)斯ク稱レ居レリ)ニ謁見、許サレズヤト云ヒレシ皇右、懐胎ニテ本月ガ臨月ナリ到底許サレズト云ハル

余、何故ニ皇右ニ謁見セント云ヒ出シタルカ其動機、曾テニルレハ氏ガ自王右、甚ククバハレナリト云ヒレシキ、居タレバ何トナク余、好奇心ヲ操カレタルニ依ル

謁見許サレズハ兩者ニ對シ親王ヲ煩シ聊カ献ズル物アラント云ヒレシ親王、快諾シテ皇宮ニ持タセラレタリ

6 ランミンチユル王トノ會見

花崎納

一、ラレシシキエル王、曾テサ模鄂公旗ノ鎮國公タリシ人ナリ昨年  
 扎薩克圖旗ト共ニ民國ニ及レテ一大擾乱ヲ記シタシ張本人  
 今外蒙ニ據テ外務部ヲ侍部ノ位置ニアリ

二、王ニ從テ外蒙ニ来リシ者ニセハ十人アリト云フ此等ノ多クハ外  
 蒙政府ノ各官衙ニ仕ヘ居ルモノ、如ク王ト會見中通譯ヲナ  
 セル者ニ王ノ臣下ニシテ兵部ニ勤務シ居ルト云ヘリ

三、始テ海山公ニ王ノ居所ヲ尋ネタルニ二三月前当地ヲ去レリ  
 ト云ヘリ然ルニ烏養王ニ此人ノ住居ヲ教ヘタリ此人ヲ訪ヒ  
 タル時誰ニ就テ余ノ住居ヲ知レリヤト問フニ王ニ其住居ヲ秘レ  
 居ル様ニモ思ヒシ其何ノ爲ナルヤヲ知ラズ

四、王ニ余カ曾テ王ノ旗下タリシ鍾東縣靖安縣等ヲ旅行シ  
 且今ノサ蘇鄂各旗ノ印軍(恒理)壽明阿等ノ名刺ヲ出シ其  
 等ノ詠ヲナセシニ非常ニ興味ヲ以テ備カレタリ

海軍

五、其後王ニ話ニ来レトムヲ以テ傳ヘラルル到レバ午餐ヲ共ニセン  
 トテ酒食ヲ出サシ此時余ニ王ニ向ヒ日本ガ内蒙ニ鉄道ヲ布設  
 スル也キハ烏養王ニ大ニ賛成スト云ヒレガ王ノ意ハ如何ト問ヒレ  
 ニ余モ同意ナリト云ハル

六、王ニ未ダ老境ニ入ラズ才氣煥發ト云フガ如キハナケレドモ志  
 操確固タル人ノ様ニ見受ラレタリ

7 タリハン王トノ會見

一、此人、清朝時代幫辦大臣タリシ人ナリト云フ

二、庫倫付近ノ地ニ此王ノ旗下ナリト云ク

三、大喇嘛不登ニ付此人内務大臣ヲ代理スト云フニ據リ余ノ  
 旅行ニ付便利ヲ與フヘラレシコトヲ請ヒレニ行キタレドモ余ノ政務  
 ニ関セザルモノ、如シ蓋シ此人、清朝時代庫倫ニ於ケル世家  
 古大臣タリシ關係ヨリシテ今ノ政府ニ重用セラレザル模様ナリ

花崎納

子 陸軍大臣 タライ王ト、會見

一 王、臣下ノ一人ヲ遣ハシ余ト會見ヲ望ムル使、者、曰、王ヨリ訪フベキカ訪フトスレバ何日ノ何時ガ御都合ヨキヤト余、此方ヨリ答上スベシ 朔日午前十一時ニト約セリ

二 王云ハル、様別ニ要事トナハレ只貴下カ当死ニ考ラレシヲ聞キ日本人ト懇親ヲ結ブハ實ニ余ノ願ナリト云ハレ種々雜話スル所アリタリ

三 王、年未タ二十代ニシテ而陸軍大臣ノ位置ニアリ王公等カ何ノ為ニ余ト會見ヲ求テラルルヤ余自ラモ不思議ニ感ゼレ程ナリ然レドモ是レ全ク蒙古人ガ日本人ニ對シ好意ヲ表シ以テ日本ノ歡心ヲ得日本ニ信頼スル所アラントシテ高レタル者タルニ疑ナレ余ニ取テハ王公等ニ接シ置タハ余ノ目的タル旅行ヲ安全ニ且滞リナク遂行

海軍

スレ基ナリト思意セリ(果テ余ハ其等ノ御蔭ヲ以テ外蒙ニ於テ到ル地騎馬ト荷馬車ヲ出シ案内ノ役人隨ヘリ且余ノ為ニ宿舎ヲ備ヘタリ内蒙ニ於テハ右王府ノ賓客トシテ過ギタリ要スルニ余ハ只ヒトリ旅ビナレドモ堂々キトシテ内外蒙在リ跋渉スルコトヲ得タリ)故ニ余ハ庫倫滞在中殆ド毎日王公トノ往來ヲナセリ是レ支那人及露國人ノ目ニ聊カ異様ニ感セラレタリヤモ知レズ

9 晚餐中ニルルル以ト、談話

一 九月八日夜八時晚餐シ共ニセントノ約束ハ余カ初對面ノ日即五日ニ成サレ居タルヲ以テ約、如ク露國副總領事館ニ到ル

二 主人ニルルル以、備勤ニ三年居テ英語ヲ流暢ニ説ル

花崎納



晚 寝長ヲ其ニセシハ主人ノ外英語ヲ少ク解スル書記官一名  
ト余ト三名ナリシ

三、レル氏、單身ニテ住ヒ居ルナリ余カ始テ會見セル時氏  
只独リ此領事館ニ居ルヲ以テ君ニ当地滞在申此領事館ニ  
居テ如何ト勸メラレドモ斯クテハ余ノ自由行動ヲ束縛  
セラルル恐アルヲ以テ休ヨリ断ハレリ

三、レル氏、新聞ニ據ルハ貴下ニ外交事務官ト云フコトナラレ  
タリト云フカ如何ト問ヒレシ然リ八月ニ其電報ヲ受領セリト  
差テ哈ル濱總領事ヨリ氏ニアテタル紹介状ニ勅任官ニ  
使用スルト云フ尊称ヲ用ヒ居タリ

四、ウツカ、乾杯屋有テレル氏、諧謔ノ言ヲ弄レ居ハアノ  
「ビウケルホテル」(彼、巻礼ニ未テ其奇麗ナラザルヲ知ル)ニ在  
テ如何ナル食事ヲ取り居ランヤト問フ余ハ「ビウケルホテル」

海軍

ニ在テ露語高ヨリ色々ノ食品ヲホノ西洋食ニ似タル者ヲ作ラシメ  
居レリト云ヒ倍席ノ書記官「ビウケルホテル」意ヲ解セザル  
ヘレト思ヒ彼ニ向ヒ余ノ宿泊セルホテルハ支那人中一等ノ者ナ  
レドモ支那人ノ事ナレバ不潔ナリ然レ「ニケエホ」(何櫃フモノカ  
トノ意ニテ露語ヲ使用セリ)ト語氣ヲ強テ且曰余ハ是レヨ  
リ外蒙ノ砂漠ヲ横絶シテ興安嶺ニ向ヒ内蒙ノ所々ヲ  
通過シテ長途ノ旅行ヲ為ス者ナリ此間支那人ヨリ一層不潔  
ナル蒙古人ノ家ニ宿泊セザルヲ得ザル身ナリ今ノ支那人ノ旅館ノ  
不潔「ニケエホ」語シタルニ兩人共ニ水ニ笑ヒ余ガ使用セル  
怪シク露語ヲ解レタル様ナリキ

五、レル氏、当地ニ「余一人ニテ甚サレ日本領事館ノ設  
置アラバ如何ト問フ余ハ余ノ意見トシテ今其必要ナカルベシト  
答テ氏ハ亦日本ノ商人当地ニ来テ高買シテ如何ト云フ余

花崎納